SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における成長過程と成長概念について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 良孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000472

ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における成長過程と成長概念について

小　林　良　孝

『はてしない物語』の中心テーマは何か。これについては、著者エンデ自身がきわめて明確に語っている。

エブラー　モモというのは、モモが存在してはならない世界にいる。そこにそのままいつづける。バスチアン・バルタザール・ブックスの父親は、あいかわらず義歯をつくっている。バスチアン少年がもどっていく世界は、本質的には、いっさいなにひとつ変化していなかった。ちがうかな？

テヒル　そうよ。でも、新しい共同体が成立したわ。

エンデ　バスチアンのお父さんは義歯をつくっている。いったい、そのどこが悪いのだろう？　どうして変化していなくちゃいけないのかな？　なによりも問題は、別のところにあるのだよ。

「はてしない物語」でたいせつなのはね、バスチアンの心の成長のプロセスなんだ。彼はとにかくまず、自分の問題と対決することを学ばなくてはならない。彼は逃げだす。けれども逃げることは必要なんだ。なにしろ、逃げることによって彼は変わるんだし、自分というものを新しく意識するようになる。そのおかげで、世界というものに取りくめるようになる。物語の冒頭、父親に対する不安と、コレアンダーにたいする不安が描かれているが、じっさい物語は、そのふたつの不安の敷居をバスチアンがまたぐところで終わる。それから先どうなったかは、また別の物語でね、また別の機会に話されることになる。「はてしない物語」というのは、昔ながらの意味での教養小説で、そこでは心の成長というのが描かれている。だから産業社会やテクノロジーなどの問題とはいっさい関係ないんだ。なにしろバスチアンにとっては、まったく個人的なオデュッセイが問題なんだから。(1)

『はてしない物語』の主要テーマは、10歳くらいの少年バスチアンの心の成長のプロセスだ、というのだ。テーマは心の成長のプロセスだというのだから、

身体の成長のプロセスは、主要な問題ではないのだ。つまり、バスチアン少年が、同級生との殴り合いのけんかに強くなるとか、50メートル走の成績が20秒から15秒にあがるとか、ボール投げの成績が20メートルから25メートルにあがるとかの問題ではないのだ。エンデがこの物語でテーマとしているのはそういう類の問題ではなく、10歳くらいの子供の心すなわち人格の成長、すなわち心の発達過程だというのである。つまりこの物語は、児童の発達心理の物語なのである。児童の心の成長と聞けば、子供っぽい人格から大人にふさわしい人格へと変化していくことを期待する。ではこの物語では、バスチアン少年の人格はどう変化していくのだろうか。その具体的な成長過程と具体的な成長内容を本稿で検討することにしよう。

Ⅰ．恐怖心

1．コレアンダー氏に対する恐怖心

『はてしない物語』は、雨の降りしきる11月のある日、朝8時を少しまわった頃、とある古本屋の店で始まる。この古本屋の主人はカール・コンラート・コレアンダー氏はいかつい体格の子供ぎらいの老人と呼ぶべき年頃の男である。いわば、ＫＫＫじいさんである。この日の朝、でぶで顔色の悪い10歳くらいの男の子が、ずぶぬれになって慌てふためいて、この店内に駆け込んできたのである。この少年がこの『はてしない物語』の主人公、バスチアン・バルタザール・ブックスである。いわば、ＢＢＢ坊やである。こうして、このＢＢＢ坊やは、このＫＫＫじいさんと面と向かい合って立つはめになったのである。

バスチアンは、このときコレアンダーさんから受けた第一印象を次のように述べている。

> 顔は赤ら顔で、その顔はかみつき癖のあるあのブルドッグを想い出させた。(2)

バスチアン少年は、コレアンダー氏に対して、目の前にいきなりかみつき癖のあるブルドッグと出くわしたような恐怖心を懐いたのである。コレアンダー氏にジロジロ見まわされると、牙をむき出しにして今にも襲いかかってきそうなブルドッグににらまれているような気がしてバスチアンの恐怖心はますますつのり、背すじに寒気が走り、足は立ちすくむ思いであった。

コレアンダー氏の方も、バスチアンに対する敵意とでも受け取れるほどの軽蔑の念を、目つきや表情に表わしただけでなく、露骨な言葉でまくしたてる。

「フン、なんだガキンチョか！」そう言うと彼はまたさっきの本を開い

て、読み続けた。

その少年はどうしていいのかわからず、そこにつっ立ったまま、大きな目を見開いて、その男を見つめていた。ついにその男は、――前と同じようにページとページの間に指を差し込んで――パタンと本を閉じて、ブルドッグがうなるような声で言った。「おい、こら、おれは子供には我慢ができないんだ。このごろでは世間どこでも、おまえみたいな子供たちと、どはずれのから騒ぎをするのがはやりのようだが、――そんなことはおれはまっぴらだ！　子供なんかだいっ嫌いだ。おれにとっては子供は、うるさい愚か者、だだっ子にすぎない。何もかもぶちこわすだけだし、本はジャムでよごすし、ページはむしり取るし、大人に心配をかけたり、大人を困らせたりするだけだ。……うちには子供用の本は置いてないし、うちの本は、どの本だっておまえなんかには売ってやらないぞ。さあ、わかったな！」……少年は黙ったままうなずいて帰りかけた。しかし、……もう一度まわれ右して、小さな声で言った。

「しかし、皆が皆、そうというわけではないのです。」(3)

これをきっかけにして、バスチアンとコレアンダー氏との会話は、もうしばらくは続いて行くことになる。けれども、ここまでで明確にされたことは、バスチアンのコレアンダー氏に対する極度の恐怖心と、コレアンダー氏のバスチアンをはじめとする子供一般への、これまた極度の露骨な嫌悪感なのである。

2．学校友達に対する恐怖心

コレアンダー氏は、さき程バスチアンが店に駆け込んできた時の彼の様子を不審に思って、誰かに追われているのだろうと問いつめる。案の定、バスチアンは人に追われていたのである。しかし、コレアンダー氏の予想に反して、バスチアンは警官に追われていたのではなく、学校友達にいじめられて、逃げてきたのだという。登校時、校門の前で、彼の学校友達が彼を待ち伏せしていて、彼をつかまえてからかったり、こづきまわしたりして、彼をいじめるというのである。それで今朝も彼らから逃げてきて、逃げ込んだ所が運わるく、怖いコレアンダー氏の店だったというわけである。

「それでおまえは、されるままになっているのか？」

コレアンダー氏は、しばらくの間あきれてこの子の顔をみつめていた。それからたずねた。「なぜおまえはやつらに一発くらわしてやらないんだ？」

バスチアンは目をまんまるにして彼を見つめて言った。「いやだよ。僕、そ

んなことはすきじゃないよ。——僕はボクシングは上手じゃないんだ。」
「じゃあ、レスリングはどうなんだ？」コレアンダー氏は知りたがった。「走りっこは？　水泳は？　サッカーは？　体操は？　おまえは、こういうことは全然だめなのか？」バスチアンは頭を横にふった。
「つまりおまえは、弱虫なんだ、そうだろう？」とコレアンダー氏は言った。
バスチアンは肩をすくめた。
「それにしても、口をきくことぐらいはできるだろう。なぜおまえは、馬鹿にされても口もきけないんだい。」
「いちど、そうしたんだけど……」
「それで？」
「やつらは僕をごみ箱の中へほうり込んで、ふたを閉めて、紐でくくりつけちゃったんだ。人に気づいてもらうまでに、僕は２時間も大声で助けを求め続けていたんだよ。」
「フーン」とコレアンダー氏はうめくように言った。「それでおまえは、今ではもう勇気がなくなってしまったというわけだ。」
バスチアンは、うなずいた。
「そのうえ、おまえは臆病者だってわけだ。」コレアンダー氏は、ずけずけと言った。バスチアンは、うなだれた。(4)

つまり、バスチアンは弱虫（体力・腕力が弱い）なうえに、臆病（気力が弱い）だというのである。それで、それらの学校友達が怖くて、学校へも行けずに逃げてきたというわけである。弱虫でもガリ勉屋で、せめて勉強の成績だけはいいのかと思って、そうたずねると、「去年は落第した」のだという。「なんてこった！　まったくいいところなし。」(5)の少年だったのである。

３．学校と学校の先生に対する恐怖心

学校友達といえば学校、学校といえば学校の先生がいるにきまっている。では、バスチアンと彼の学校の先生との関係はどうなっているのであろうか。
例えば、歴史のドレーン先生。

……　この先生は、バスチアンが、戦争のあった年とか、歴史上の人物の生年月日とか統治期間とかを全然覚えることができなかったので、バスチアンを皆の前で笑いものにするのが特にすきだった。(6)

体育のメンゲ先生もそうだった。

たぶん今日は、重いメディシンボールでドッジボールをするのだろう。バスチアンはこの競技が特にへただった。——だからどちらのチームも彼を自分のチームに入れたがらなかった。時々、石のように固い小さいボールでこの競技をさせられることもあったが、このボールにあてられたときは特に痛かった。バスチアンはいいカモだったので、いつも、しかも力いっぱい、ぶっつけられた。おそらく今日は、ロープ登りもあったかもしれない。——これはバスチアンが何よりもきらいな訓練だった。ほかの大多数の生徒は一番上まで登ってしまっているのに、バスチアンはいつも顔を真っ赤にしてロープの一番下に、小麦粉の袋のようにぶらさがったまま、半メートルも登れなかった。それでクラス全員、笑いころげてよろこぶのだった。おまけに、この体育のメンゲ先生もこのチャンスを逃さず、バスチアンをいいカモにしておもしろがるのであった。(7)

バスチアンが、日頃学校友達からいじめにあっていることを察知している先生はひとりも居ないようであった。だから、バスチアンのための保護策は全々行われていないし、バスチアンをいじめいている生徒たちに対する指導も何も行われていない。というより、このことに関しては何も物語られていない。

バスチアンがコレアンダー古書店に逃げ込んできた日の朝は、学校へは行ったけれども遅刻であった。バスチアンは、このときの気持を次のように述べている。

そこ、ここに歩いている人々は居たけれども、その大通りはひとっこひとり居ない街のように思われた。たっぷりと遅刻してきた者にとっては、学校の周辺は、人の死にたえた世界のようにうつるのである。バスチアンは、一歩進むごとに、心の中で不安がつのるのを感じた。それでなくても前々から、学校はこわかった。バスチアンにとっては学校は毎日毎日、うちのめされているばかりの所だった。先生たちもこわかった。先生たちは、親切にバスチアンの良心に訴えかけてくるかと思うと、次にはバスチアンに彼らの怒りをぶちまけてくるのである。他の子供たちもこわかった。彼らは、バスチアンを笑いものにし、彼がいかに不器用で、いかにいくじがないかを思い知らせるチャンスをけっして見のがしはしなかった。バスチアンには、学校生活はもうずっと前から、無期懲役刑のように思われていたのである。(8)

バスチアンが、自分の学校の先生たちや学校生活全般に対してどう思っていたかについては、これ以上言葉をついやす必要はあるまい。

4．父親に対する断絶感と恐怖心

コレアンダー古書店に逃げ込んで来たバスチアンとコレアンダー氏との会話は、まだまだ続いている。バスチアンは問われるままに、家庭のこともうちあける。お母さんは何年か前に死んでしまい、今は歯科技工師をしている父親と二人暮らしだという。この父子関係はどうなっていたのだろうか。ここ数年来の全般的な父子関係については、今朝の古書店内でのできごとの中では語られていない。これについては『はてしない物語』が更に進展して、母親の死が想い出される場面で語られることになる。

> それからとうとう白衣を着た頭のはげた男の人がやってきた。そのひとは疲れきった様子で、悲しそうに見えた。彼はお父さんたちに、あらゆる手はつくしたのですがだめでした、残念でした、と言った。彼は、お父さんたちの手をしっかりと握って、「心からのおくやみ」を述べた。
>
> バスチアンとお父さんとの間の関係が何もかも変わってしまったのは、その後だった。
>
> 変わったと言っても、変わったのは外面的にではない。バスチアンは欲しい物は何でも買ってもらえた。三段ギアの自転車、電池で走る鉄道列車、たくさんのヴィタミンの錠剤、本を53冊、１匹のゴールデンハムスター、熱帯魚の泳いでいる水槽、小型カメラ、６本の特許つきのナイフ、その他、何でも買ってもらえた。しかしだ、本当のところはそんなものはどれもこれも、どうでもよかったのだ。
>
> バスチアンは、お父さんは以前は彼とふざけてくれたことをおぼえていた。時々は、物語を語ってくれたり朗読してくれることもあった。しかし、それはもう昔のこと。今ではお父さんと話をすることさえできないのだ。お父さんは、誰も通りぬけることのできない目に見えない壁にぐるりと囲まれているみたいだった。お父さんは、けっして叱ってもくれなかったし、ほめてもくれなかった。バスチアンが落第した時でさえ、お父さんはなにも言ってくれなかった。ただ、放心状態で、しかし悲しそうな面持ちで、バスチアンをじぃーっと見つめていただけだった。バスチアンは、こう感じていた、お父さんにとって僕なんかもはや全然存在さえしていないんだ、と。逆に、僕にとってお父さんなんかもはや全然存在さえしていないんだ、とバスチアンはたいていの場合、感じていた。(9)

妻の死のショックで極度のうつ状態に陥ってしまった父。そんなお父さんはバスチアンにとっては、誰も通りぬけることのできない、バスチアンでさえも

通りぬけることのできない固い冷たいガラスの中深く閉じこもってしまったように見えたのである。そしてこの父親像が、バスチアンの心の中に定着してしまったのである。話はとんで、『はてしない物語』も終盤にさしかかる頃になるが、バスチアンが月の子・ファンタージエン国へ行って道に迷い、この現実界へもどる出口を探し出す手がかりをすべて失ってしまった時、その手がかりとなる最後の唯一のものとして、バスチアンが盲目の坑夫ヨルのミンロード抗、すなわち忘れられた夢の採掘坑から採掘しだした１枚のうんも層の中にとじこめれられていた男の像は、正にまぎれもなく、この父親像だったのである。それはまた後の話。ここ当面は、この親子のどうしようもなく冷たい断絶感、お父さんにとっては自分なんかもう居ないも同然なんだというバスチアンの絶望感と虚無感、こういった感情がこもごも、このはてしない物語のここ当面の進展を支配して行くのである。

それでは、バスチアンは完全に父親に対する心のつながりを失ってしまっていたのだろうか。逆に、父親の方もバスチアンに対する愛情を完全に喪失してしまっていたのであろうか。上の引用文にすぐ続いて次のように述べられている。

> お父さんが悲しんでいることは、バスチアンにはよくわかっていた。バスチアンだってあの頃は夜通し泣きあかすことはしょっちゅうだった。しかも、あまりにも激しく泣きじゃくるあまり、ゲロをはきながら泣くこともよくあった程だ。――しかし、そういうことは時とともに徐々に過ぎ去っていった。そして、依然として確かにバスチアンは存在していたのである。お父さんは、なぜ僕と話をしてくれないのだろうか？　お母さんのことなど、なぜお父さんは僕と話をしてくれないのだろうか？　なぜお父さんはすごく重要な用事しか話してくれないのだろうか？(10)

お父さんにとっては僕なんかはもう存在さえしていないのだ、というバスチアンの思いは、本当は思いすごしだったのだ。バスチアンの願望を満たすにはあまりにも不十分ではあったけれども、お父さんにとってはバスチアンは依然として確かに存在していたのである。願望が満たされないあまり、お父さんなんか僕にとっては存在していないも同然だ、と思いながらも、バスチアンは小さな胸の奥底で、お父さんの愛を求めて、熱い思いをこめて必死にお父さんに向かって叫びつづけていたのである。「お父さんは、なぜ僕と話をしてくれないのだろうか？」という思いは「お父さん！　僕と話をしてちょうだい！」という心の叫びなのである。バスチアンにとっては、お父さんは依然として確かに

存在し続けていたのである。今はひとまず消え去ってしまったかのように描かれているこの思いが、いうならば親子間の愛情が、そして更に心が成長してこれを普遍化するならば、人間愛が、この教養長編童話である『はてしない物語』の始めから終わりまで一貫して追求されている一番大切なテーマなのである。

この意味で、上に引用したこの一節は、この『はてしない物語』の進展を可能にする最も重要な鍵なのである。

父親の愛を求めて必死になって力の限り叫び続けていたとはいえ、それはバスチアンの深層心理の無意識の世界でのこと、意識的な日常生活の中では、父親はバスチアンにとっては冷たい近寄りがたい存在であった。その父の存在を否定的に意識することは、その冷たさから自分を守る自然な心の動きだった。とにかく、日常生活においては、バスチアンにとっては父はむしろうとましい存在だったのである。

話を、この『はてしない物語』が始まった日の朝に、すなわちいわば今日の朝に、もどそう。逃げこんだ古書店でコレアンダー氏と話をしているうちに、店の奥の方の部屋で電話のベルが鳴りはじめる。コレアンダー氏はバスチアンとのおしゃべりを中断して、奥の部屋へ姿を消す。今までコレアンダー氏が座っていた皮のソファーの上には、バスチアンがこの店の中へ駆け込んできた時、コレアンダー氏が読みふけっていた本で、バスチアンと話し込んでいた間も片時も手から離さなかった本が、置かれていた。鉄が磁石に引き寄せられるように、バスチアンの心はその本に引きよせられた。見ると、その本は『はてしない物語』という標題の本であった。それは運命的なであいであった。バスチアンは、そうっと手をのばし、そのあかがね色の絹で装丁されている本に手をふれた。その瞬間、まるで「わなのかけがねがおりたように」バスチアンの心はその本にとらえられてしまったのである。奥の部屋にひっこんでいったコレアンダー氏は、電話口でなにやら話しこんでいる様子で、いつまでたっても店に出てこない。「バスチアンはどうしてもこの本がほしくなった。」「自分で気づく間もなかった。バスチアンはその本をオーバーの下にかくした。」(11)そのままそおうっと店をぬけ出し、ともかくも学校へ向かって、ハア、ハア、息をきらし、横腹が痛むのもかまわず、走った。走りながら、バスチアンは思った。

こうなった今、当然、もう家へは帰れない。……バスチアンがすることのできる唯一のことは、どこかへ、遠くへ、逃げることだけだった。息子が泥棒になってしまったことを、お父さんに知られてはならないのだ。ひょっとしたらお父さんは、自分が居なくなったことに気づかないかもしれない。

こう考えることが、むしろ慰めであった。」[12]

こうしてバスチアンの心は、父親からドンドン離れていったのである。

バスチアンは走るのを止めた。今はゆっくり歩いていた。その大通りのつき当たりには校舎が見えていた。知らないうちに、バスチアンは通い慣れた通学路をたどっていた。その道路のあちこちには人々が歩いていたけれども、バスチアンにはその道路はまさに人っ子ひとり居ないかのように思えた。[13]

バスチアンの心の風景の中では、父親だけでなく、現実界の人それ自体がもはや存在しなくなっていたのである。

Ⅱ　逃避

1．身体の逃避

バスチアンは学校にはたどりついた。けれども遅刻だった。ともかくも、足どりは教室へ向かっていた。

バスチアンは、床磨き用ワックスの臭いや、湿ったマントの臭いがプンプン臭っている音のよく反響する廊下を歩いていった。校舎の中で彼を待ち伏せしていた静寂は、まるで耳に詰栓を詰めこんだように、彼の耳をふさいだ。ついに彼が、まわりの壁の色と同じく、古くなったほうれんそうと同じ色に塗られている彼の教室のドアの前に立った時、彼ははっきりと気づいたのである。たった今から以後は、たとえ自分がこの教室の中に居なくても居なくなったことにはならないのだ、ということに気づいたのである。だから彼は今すぐ、どこへでも行くことができた。

でも、どこへ？

こうしてバスチアンは、彼の教室の中での彼の存在そのものを自分で消し去ったのである。物語は次のように続いている。

バスチアンは、しあわせをつかもうとして、船員として雇ってもらって広い世界へ船出して行った少年たちの話を本の中で読んだことがあった。彼らは、海賊になったり英雄になったりしていた。何年も後に大金持ちになって故郷に帰ってくる者も居た。でも、誰もそれが昔のあの少年だとは気づかないのであった。

でも、そんなことをする勇気はバスチアンにはなかった。だいいち、自分を船員として雇ってくれる人がこの世の中に居るなんて、想像することさえ出来なかった。それに彼は、そのような大胆な冒険に適する船が停泊

している港町へ行く道を全く知らなかった。
だから、どこへ行こうか？
突然、バスチアンはたった一つのよい場所を思いついた。あそこなら、——少なくともここしばらくの間は——誰も自分を探しに来る者はいないだろうし、見つかることもあるまい。

物置部屋は大きくて暗かった。ほこりと除虫剤の臭いがしていた。銅板でふいた大屋根を雨足が打っている音以外、物音は何も聞こえてこなかった。古くなって黒ずんだ太い柱が同じ間隔で床板から立ちあがり、ずっと高い所で屋根組みの梁と交わって、その先はぼんやりと闇の中に消えていた。あちこちにハンモック程の大きさのくもの巣がかかっていて、すき間風でかすかに、無気味に、ゆれていた。天窓のある上の方から乳白色の光が差しこんでいた。…
ギーッと、ゆっくりとその物置部屋のドアが開いた。ほんの一瞬の間、長い光の筋がその部屋にさし込んだ。バスチアンは、その部屋の中へスルッとはいり込んだ。それからまた、ドアがギーッと鳴って、閉まった。彼は大きい鍵を内側から鍵穴にさし込んで、ぐるりとその鍵を回した。それから彼は更に、かんぬきをかけて、やっと安心してフーッと息をついた。
こうしておけばもう実際、見つかることはあるまい。(14)

こうしてバスチアンは、彼の現実世界のすべての人々から逃げ出し、すべての人々から身を隠したのである。バスチアンはこうして、父親からも逃げ出し、コレアンダー氏からも逃げ出し、学校友達からも逃げ出し、学校の彼の先生たちからも逃げ出し、誰にも気づかれることなく、学校の屋根裏の物置部屋に逃げ込んだのである。バスチアンは、自分の安全を確保することのできる世界を、この物置部屋の中でやっと見つけ出したのである。そして、家庭の中で自分で消去した自分の存在を、学校の教室の中から自分で消去した自分の存在を、この物置部屋の中でやっと再び見出したのである。そして、自分の身体の安全を確信することのできる限りでの心の安全も、彼はやっとここで実感することができたのである。これはまずは、彼の現実世界からの彼の身体の完全な逃避であった。

バスチアンは、この物置場を前からよく知っていた。使い古した椅子や机や教卓、ひびの入った古い黒板、地図などの掛け台、マットや跳馬などの体育用具、理科の教材の狐や鷲の剥製、それに人間の男の完全な骸骨までぶらさげて

あった。しかしバスチアンは、もう見慣れていたせいか、何もこわくはなかった。その他、いろいろな物が雑然と置いてあった。バスチアンはずぶぬれになったマントと長ぐつを脱ぎ、灰色の軍用毛布を肩からかけて体にまとい、マットの上にきちんと座って、今しがたコレアンダー古書店から盗んできた『はてしない物語』という本を手にとった。不思議なくらい、おごそかな気分であった。その本を開いて、第１ページから読み始めたのである。

２．心の逃避

バスチアンは背が低く、エックス脚で、でぶで、顔色が悪かった。その上、体力が弱く、不器用でのろまだった。だから、体育の成績は悪かった。他の科目の成績だって、体育の成績よりけっしていいわけではなかった。去年は落第していたのである。バスチアンが得意だったのはたったひとつ、それは空想すること、物語を作ることだけだった。そして、バスチアンが好きなことはたったひとつ、それは本を読むことだけだった。

> 人間の情熱とは不思議なものである。子供だって大人だって、それにちがいはない。情熱のとりこになってしまった者は情熱を説明することはできないし、情熱を体験したことのない者は情熱を理解することはできないものだ。山頂を征服するために命をかける者も居る。実際、その理由を説明することができる者は誰ひとり居ない。その当の本人だって説明することはできないのだ。目もくれようともしてくれない人の心を得ようとして破滅する者。美食・美酒の享楽に負けて身を持ちくずす者。賭事に一切合切の財産をつぎこむ者。けっして実現されることのできない固定観念のためにすべてを犠牲にする者。今居る所以外の所へ行きさえすればしあわせになれると信じこみ、一生の間世界中を旅する者。権力を獲得するまで心がやすらぐことのない者。要するに、人さまざまなように、情熱もまたさまざまで無数にあるものなのである。
>
> バスチアン・バルタザール・ブックスにとって、それは本であった。[15]

読書は、バスチアンが自分の全霊・全情熱を注ぎ込むことのできる唯一のことだったのである。つまり読書は、彼のうちひしがれた心の唯一の逃避場所だったのである。

そして、人知れずひそかに学校の物置部屋にまずは彼の身体を逃避させることに成功したバスチアンの唯一の心の逃避場所となったのは、今朝、彼がコレアンダー古書店から盗んできた『はてしない物語』という本だったのである。

ここで、本稿の論旨を混乱を起こさず正しく理解してもらうために、一つとりきめておかなければならない。我々が手に取って今読んでいる本は、『はてしない物語』という標題の本である。ところが、この本をここまで読み進んできたところ、この本の主人公バスチアンがコレアンダー古書店から１冊の本を盗んできて、その本を今ここで読み始めたのである。その本の表題もまた『はてしない物語』であった。つまり、『はてしない物語』という本の中に、また『はてしない物語』という本が登場してきたわけである。ここで、ひとつ取り決めをさせてもらおう。我々が手に取って読みはじめた『はてしない物語』は、『はてしない物語』・Ａ本と表示し、この『はてしない物語』・Ａ本の中に登場してきた『はてしない物語』という本、つまり、バスチアンがコレアンダー古書店から盗んできた『はてしない物語』という本は、『はてしない物語』・Ｂ本と表示することにしよう。

それで、誰ひとりにも知られずにひそかに学校の物置部屋の中へ逃げ込むことに成功したバスチアンが、全霊・全情熱をかたむけて読み始めた本は、『はてしない物語』・Ｂ本だったのである。それでここからは、『はてしない物語』・Ａ本の内容は、バスチアンと『はてしない物語』・Ｂ本との関係へ進んで行く。

バスチアンが一心不乱に読みはじめた『はてしない物語』・Ｂ本は「おさな心の君」というお名前の女王様が君臨している「ファンタージエン」という名前の国の物語であった。この物語は、次のように語り始められている。

> ハウレの森の動物たちは皆、自分のほら穴や、自分の巣や、自分の隠れ家の中に身をひそめていた。
>
> 真夜中だった。太古からの巨大な樹木の梢は、嵐に吹かれてザワザワと鳴り響いていた。

こんな森の奥深く、とある岩角の岩棚で、偶然に３人のファンタージエン国の住人が出会ったのである。ひとりは鬼火族、ひとりは岩食族、もうひとりは豆小人族で、各々、ファンタージエン国の全くちがう方向の地方（国）の住人で、皆お互いに初対面であった。恐る恐る話しあってみたら、各々全員、各々の種族を代表する使者で、各々の国で起こっているゆゆしい現象を、ファンタージエン国の女王おさな心の君へ報告しに行く旅の途中だ、という。彼らの話によると、驚くことにいずれの国においても、そしてその他の地方でも、一様に「虚無」[16]が発生して、それがどんどん拡大してきて、国土それ自体もその住人も、その「虚無」の中へどんどん飲み込まれていく、というのである。こんな情報を交換しあってファンタージエン国を襲ってきた危機に驚き、恐れ、腰を

おろし休むひまもおしんで、一刻も早く女王「おさな心の君」の所へ到着しようと、各々再び自分たち独自の旅の乗り物に乗って、ハウレの森の闇の中へ旅立って行く。

他方、時を同じくして、ファンタージエン国の中心にあるエルフェンバイン塔では、女王おさな心の君が、原因不明の病におかされはじめて、病床に臥せっていたのである。ファンタージエン国の津々浦々から499人の誉れ高い名医が召集され、一人ひとり全員、おさな心の君を診察してみたけれども、誰ひとり、女王様のご病気の原因も、病名も、ましてやそのご病気の治し方も、知らなかった。

女王おさな心の君の病の進行は、ファンタージエン国を襲ってきた「虚無」の拡大と全く同じことなのである。だから、もしもおさな心の君が、この病気で崩御することにでもなれば、それはファンタージエン国が「虚無」に飲みこまれて消滅することになるのである。それ故、ファンタージエン国を虚無による消滅から救うためには、是が非でもおさな心の君を、この原因不明の難病からお救いしなければならないのである。

国の存亡の危機に陥っている今、おさな心の君のご病気を治すことのできる医者が現れるのを、臥してただ待っている時間のゆとりはなかった。そこでおさな心の君は、この病から自分を治し、同時にファンタージエン国を滅亡から救うことのできる救済者を探し出し、病床の自分の所へ連れてくる「おおいなる探索」[17]の任務を、ファンタージエン国の緑の肌族の勇敢なる狩人アトレーユに命じたのである。アトレーユもバスチアンとほぼ同じ年齢で、10歳くらいの少年であった。

バスチアンが学校の物置部屋に逃げ込んで、ひとりひそかに一心不乱に読み始めた『はてしない物語』・B本は、アトレーユの「おおいなる探索」の大冒険談だったのである。

この『はてしない物語』・B本が、バスチアンにとってどういう意味を持つことになるのかを明確にするためには、この物語の著者ミヒャエル・エンデの文学創作の基本構想を理解しておくほうがいいであろう。これについては、ミヒャエル・エンデ自身、いろいろな機会にほぼ同じ趣旨の発言をしているが、井上ひさし氏との対談で語っている言葉が最も簡潔明解であろう。

> エンデ　私の文学の創作法は、外の世界を内の世界に、内界を外界に換えて描くという互換の方法をとっていますが、…[18]

だから、エンデの作品には、外界を内界に換えて描いているものと、これと

は逆に、内界を外界に換えて描いているものとの二種類のものがあるはずである。

『はてしない物語』・A本で言えば、外の世界とは、バスチアンが現実に生活を営んでいる彼の家庭とか学校とか街とかの風景である。内の世界とは、彼の心の中の風景、すなわち、前半の「おさな心の君」のファンタージエン国の風景と、後半の「月の子」のファンタージエン国の風景である。

『はてしない物語』・A本の前半、すなわち

「塔の時計が12時を打った。」(19)

という箇所までは、内界を外界に換えて描いている場面と、逆に外界を内界に換えて描いている場面とが、目まぐるしく入れかわりながら話が進んで行く。バスチアンが『はてしない物語』・B本を読みはじめた頃は、どちらかと言えば、内界（おさな心の君のファンタージエン国の風景）が外界（バスチアンが現に居る学校の物置部屋の中の風景や現象、あるいは教室の中の様子、あるいは家庭内の日常生活）に置き換えられて物語られる場面が優勢である。例えば、バスチアンは、ハウレの森の樹木の枝がきしみ合う音を、物置部屋の中で聞いているような気がしている。しかし、バスチアンが『はてしない物語』・B本を読むのに熱中して行くにつれて次第に、逆に外界を内界に換えて描く場面が優勢になって行くのである。例えば、アトレーユがイグラムールに睨みつけられる情景を読みながらバスチアンは思わず恐怖の叫び声をあげてしまうのだが、バスチアンのその叫び声はそのまま、物語の中のイグラムールのいる谷間に響き渡るのである。あるいはまた、学校の物置部屋の中で本を読みふけっているバスチアンの姿が、まごうかたなく、物語の中の「南のお告げ所」の「魔法の鏡」にはっきりと、うつし出されたりするのである。これは、外界のバスチアンの願望をうつしたものなのである。結局はバスチアンは、ひとたびは完全に内界（ファンタージエンの世界）へ移しかえられて行くのだが、本稿では教養長編童話としての観点から、この作品のあら筋を追うことにしよう。

「おおいなる探索」の任務をひき受けたアトレーユは、女王おさな心の君からお守り「アウリン」を授けられる。アウリンとは黄金のメダルで、その表には、互いに相手の尾をくわえ合って楕円形を形成している明の蛇と暗の蛇が浮き彫りになっている。アトレーユは一切の武器をたずさえず、アウリンを首にかけ、愛馬アルタルクスにまたがって、最速「おおいなる探索」の旅に出る。どの方角へ進むべきかさえ全く見当がつかないので、アルタルクスの足のむくままに進む。アトレーユは毎晩、巨大な緋色の牡牛の夢を見る。７日目の夜、

その牡牛がアトレーユの夢枕に立って、次のように言う。

「もしおまえがこのおれを仕留めていたなら、おまえは今は一人まえの狩人になっていただろう。しかしおまえはそれを断念した。こんどはおれがおまえを助けてやろう。アトレーユよ、よく聞け！ファンタージエン国には、誰よりも年をとっているひとりの生き物がいる。ここからはるかに、はるかに遠い北の国に憂いの沼がある。この沼のまん中に甲羅山がそそり立っている。そこに太古の沼ガメ、モルラが住んでいる。モルラをたずねて行け！」(20)

そこでアトレーユは北へ北へとアルタルクスを進める。ついに憂いの沼にたどりつき、沼の中へとアルタルクスを進める。しかし、アウリンを持っていないアルタルクスは、憂いの沼の泥に足を取られ、そのまま憂いの沼の底深く沈んでしまう。まったくひとりになったアトレーユはついに甲羅山にたどりつく。その甲羅山が太古の沼ガメ、モルラであった。モルラは、年を取りすぎていて何もかも物憂がって、アトレーユの相手をしようとしない。甲羅の中へ首をひっこめてしまいそうになるモルラから次の二つのことを聞き出す。

おさな心の君は、新しい名前を必要としておられる。新しい名前をつけてさしあげれば、女王様はまたお元気になられるということ。

でも、女王様に新しいお名前をつけてさしあげることのできる者は、ここファンタージエンの国には居ないし、それが誰なのかは自分（モルラ）も知らないということ。

では、女王様に新しい名前をつけてさしあげることのできる者が誰なのか、これを知っている人は、どこに居るのか、アトレーユはどうしても口をききたがらないモルラに必死になってたずねる。ついに、モルラは答える。

「たぶん、南のお告げ所のウユララ、あれが知っとるじゃろう。…」

「そこへは、どう行けばいいのだ？」

「おまえがあそこへ行くことは絶対にできぬわ。旅の日を一万回かさねても無理じゃ。おまえの命の方が短すぎる。あそこへたどりつく前に、おまえは死んでしまう。遠すぎるのじゃ。南のはてじゃ。とにかくずぅーっとはるか遠すぎるのじゃ。…」(21)

たとえかなわぬにしても、アトレーユは「南のお告げ所」を目ざして、ひとり更に旅を続ける。困難な旅を続けたあげくのはてに、深さも知れず、左右の長さも知れない大地の裂け目に行く手をはばまれる。その深淵に張られたねばねばした太いロープのわなに、「幸いの竜」フッフールがかかっていて、世にも

恐ろしい集合体イグラムールと、絶望的な壮絶な戦いをくりひろげている最中であった。「南のお告げ所」をめざしているアトレーユには、空を飛ぶこの「幸いの竜」フッフールが従者としてどうしても必要である。そう思って、アトレーユはイグラムールにアウリンをかざして示し、フッフールを助けてくれるよう申し出るが、聞きいれられない。それどころか、フッフールの体内には既にイグラムールの毒がまわってしまっているので、フッフールの命はあと1時間ももたない、という。アトレーユをもごちそうにしたくてたまらなくなったイグラムールは、彼らの秘密をうちあける。イグラムールに咬まれて体に毒がまわった者は、1時間以内にかならず死ぬ。しかし、この間に行きたい所へ行こうと念じれば、そこがどこであれ、ファンタージエンの中ならば一瞬にしてそこへ行くことができる、と言うのだ。その上で、イグラムールはアトレーユに、おれたちにおまえをひと咬みさせろ、と迫る。たとえ1時間であろうと30分間であろうと、「南のお告げ所」にたどりつけるものならたどりつきたいと思って、アトレーユはイグラムールに承諾する。肩に激痛が走って、気を失い、目をさました時には、そこは「南のお告げ所」の門の前であった。幸いの竜フッフールも一緒だった。そこには、この「南のお告げ所」の研究を一生の仕事としているひと組の小人夫婦隠者がいた。この夫婦がアトレーユとフッフールに薬草を煎じて飲ませて、命を取りとめさせてくれたのである。

この小人の隠者の話によると、「南のお告げ所」にたどりつくためには、三つの門を通過しなければならない、という。

第1の門は「おおいなる謎の門」である。これは2頭のスフィンクスが対面して見つめあっている間を通過しなければならない。スフィンクスが人を通してくれるか否かは全くの偶然で、理解も説明も予想も不可能である、という。

第2の門は「魔法の鏡の門」である。この門の前に立つと自分の外観ではなく、自分の内面の真相が見える、という。だから、この門の中へ入っていくことは、自分の心の真相を通過することである、という。

第3の門は、「鍵なしの門」という。この門は、はいろうという意志を強く持てば持つほど、ますます固く閉る門だという。

イグラムールに咬まれた傷が癒えると、アトレーユはいよいよウユララの「お告げ所」へ出かけていく。まずは上記の三つの門を通過することに成功する。この詳細は省略するが、ここでは次のただ一つのことだけは言っておかなければならない。アトレーユが第2の門、「魔法の鏡の門」の前に立った時、その鏡に映っていたのは、すなわちアトレーユがその鏡の中で見たのは自分自身の姿

ではなく、なんと、学校の物置部屋の中で『はてしない物語』を読みふけっているバスチアンの姿だったのだ。

とにかく、アトレーユは「お告げ所」に到着することができたのである。そこで聞いたのは、形容のしようもない程美しい「静寂の声」[22]だった。「おさな心の君をお救いするのは誰？　新しいお名前をさしあげるのは誰？」というアトレーユの問いに、「静寂の声」は歌うように答える。

ファンタージエンのかなたに一つの国があります
その国の名は、外界といいます
そこには…アダムの息子…イヴの娘…人間族が住んでいます
彼らは有史以来、名づけの才能に恵まれています
いつの時代にもおさな心の君に生命をさしあげたのは彼らだったのです
おさな心の君に新しいすばらしい名前を与えてくれたのは彼らだったのです
しかし人間がファンタージエンへやって来たのはずうっと昔のこと
彼らは道を忘れてしまったのです
彼らは我々がいるということさえ忘れてしまったのです…
ああ、たったひとりでも人の子が来てくれれば、
そうすれば何もかもうまく行くのです！[23]

こうしてアトレーユはついに、「人間」・「人の子」がファンタージエン国へやって来て、おさな心の君に新しい名前をつけてさえくれれば、おさな心の君の病は癒され、ファンタージエン国は滅亡から救われることを探しあてたのである。このくだりを読んでいたバスチアンは次のように思い、ひとりごとを言う。

「ああ、おさな心の君を――アトレーユをもだけど――救ってあげられたらいいのになあ。僕だったらとびっきりすてきな名前を考え出してやるんだけどなあ。アトレーユの所へ行く行き方がわかりさえすれば、僕は今すぐにでも行ってあげるんだけどなあ！　僕が突然行ったら、アトレーユはどんな顔をするだろうか！　でも残念ながら、そうは行かないんだ、それとも？」

それから、バスチアンは小さな声で言った。

「君たちの所へ行く道があるのなら、僕に教えてね。きっと、きっと、僕は行ってあげるからね、アトレーユ！　君はすぐわかるよ。」[24]

バスチアンのこの独白は、非常に重要である。バスチアンは初めて、ファンタージエンの国へ行って、彼らを助けてあげたいという自分の意志をはっきり

と表現したのである。つまり、バスチアンは、学校の物置部屋から、更にファンタージエンの国へと逃避しようという気になったのである。これを機に、バスチアンとファンタージエン国（おさな心の君とアトレーユ）との間の距離は、グッとちぢまったのである。バスチアンの心はバスチアンの側から、ファンタージエン国の方へ近づいて行ったのである。

話をアトレーユにもどそう。ついに女王「おさな心の君」の病を治す方法を探し出したアトレーユは、「おさな心の君」に新しい名前をつけてさしあげてくれる「人の子」を見つけ出し、その「人の子」を「おさな心の君」のもとへおつれして行かなければ、任務をはたしたことにはならないと思い、その「人の子」を探す旅を続行しようとする。しかし、フッフールは、ここでひとまずエルフエンバイン塔でアトレーユの帰還を待ちわびているおさな心の君のもとへ帰ったほうがよい、とすすめる。アトレーユは決断がつかず、１時間だけでもいいから、「人の子」を探す飛行を続けてくれと、フッフールにせがむ。この１時間が、アトレーユに大きな災いをもたらすことになる。飛行を続けるフッフールとアトレーユは、北風のリル、東風のパウレオ、南風のシルク、そして西風のマエストリルの四兄弟の風神の力くらべの大乱闘に巻き込まれ、大嵐の中の雨つぶのように、下へ上へ、東へ西へ、北へ南へともてあそばれるはめに陥ってしまったのである。そうこうしているうちに、アトレーユはフッフールの背から振り落とされ、荒れる大海原へ墜落してしまったのである。更に困ったことに、首にかけていたアウリンをさえ失ってしまったのである。嵐によって陸にうちあげられたアトレーユは、無人の町にたどりつく。この町の住人は、近くまで迫ってきた虚無の中へ、１人残らず身を投げてしまっていたのである。この町でアトレーユは人狼グモルクと遭遇する。

グモルクは、ファンタージエン国の滅亡を計る勢力がアトレーユを殺すためにファンタージエン国へ送り込んできた殺し屋であった。グモルクは、アトレーユが「おおいなる探索」の旅に出た瞬間からアトレーユを追跡しはじめ、あのイグラムールの住む大地の裂け目・深淵のふちまで追い込みながら、あと一歩のところでアトレーユを仕留めそこなっていたのである。その後、グモルクはファンタージエン国の闇の奥方ガヤによって捕らえられ、断ち切ることのできない金属の鎖でつながれて、この町に置き去りにされていたのである。こうしてアトレーユと出会った時には、グモルクは餓死寸前であった。グモルクはアトレーユに人間界とファンタージエン国との関係についての秘密をうちあけた後、世にも恐ろしいひと吠えをふりしぼるようにはりあげて、ことときれる。

グモルクは死んでいた。

アトレーユは長い間身じろぎもせず、立ちつくしていた。最後に彼は死んだ人狼に近づいて——自分でもなぜそんなことをしたのかわからなかったが——その頭の上にかがみこみ、もじゃもじゃの黒い毛に手をふれた。その瞬間、気づく間もなくグモルクの歯がパクッとアトレーユの脚にくらいついた。死してなおグモルクの悪意には威力があった。

アトレーユは、咬み合わさった歯をけんめいに開けようとしたが、だめだった。鋼鉄のねじでしっかりととめたように、巨大な歯がアトレーユの脚の肉の中にくいこんでいた。アトレーユは人狼の屍と並んで、きたない土の上にくずおれた。

虚無が、町を囲んでいる黒い高い市壁をつきぬけて、一歩一歩、とどまることなく、音もなく、四方から迫ってきた。(25)

虚無にのみ込まれる寸前の間一髪、海中からアウリンをひろいあげて、フッフールが駆けつけ、アトレーユは助けられる。この時、アトレーユもフッフールも致死的重傷を負っていた。ともかくも、この後、この二人は「モクレン宮」への帰還をはたし、「望みを統べたもう金の瞳の君」——これが「おさな心の君」の正式の名称である——に、おめどうりがかなう。この時、アトレーユは、おさな心の君を次のように描写している。

おさな心の君は花の円蓋の中に、丸くふんわりとしたクッションの上に座り、何枚ものクッションに身をもたせ、アトレーユに目をむけた。この上なくたおやかな、尊い宝のようだった。ご病気だったので、お顔はすき通るほどあお白かった。アーモンド形の目は濃い金色だった。心配や不安の影はみじんも見られず、にこやかにほほえんでおられた。きゃしゃで小柄なお体は、白モクレンの花びらさえくすんで見えるかと思える程の純白に輝くゆったりとした絹の衣装につつまれていた。せいぜい10歳くらいの名状しがたい美少女のように見えた。そして、きれいにくしけずられて肩から背へ波うちながら垂れてクッションにまで届いている髪は、——雪のように白かった。

バスチアンはハッとした。

この瞬間、彼が今までに経験したことのないことが起きたのである。……

おさな心の君のことが述べられている所まできた時、１秒の何分の１か——稲ずまの走る程のほんのわずかの間だったけれども——おさな心の君

の顔が、自分の目の前に見えたのだ。頭の中で想いうかべたのではなく、自分の目で見たのだ！　それは思いちがいなんかでは絶対なかった。それは確実だった。彼は、本には書かれていなかった細かい点までいくつも見たのだ、例えば、金色の目の上の墨で描かれた弓のように美しい２本の細いまゆ、めずらしく長い耳たぶ、たおやかな首すじの上の少しかたむけた面持ちなど。この顔ほど美しい顔は今までに見たことはない。そう確信した瞬間、バスチアンはまた確信した、彼女の名前は――月の子――だ。疑う余地もなく、これが彼女の名前だった。

そして、一瞬の間だったけれども、月の子も彼を――バスチアン・バルタザール・ブックスを見たのだ！

一瞬の間彼を見たあの眼ざしにこめられていたのは何だったのか、彼は解くことができなかった。彼女もギョッとしたのだろうか。あの眼ざしには何か願がこめられていたのだろうか。それとも憧れでもこめられていたのだろうか。あるいは――そう、いったい何がこめられていたのだろうか。(26)

こうしてバスチアンは、現実におさな心の君と会って、おさな心の君にふさわしい新しい名前を絶対的な確信をもって知ったのである。おさな心の君は、バスチアンはまだ「外の国」である人間界にとどまってはいるけれども、アトレーユと同じくらいすぐそばに居ることをはっきりと知っているのである。しかし、アトレーユはバスチアンをすぐ近くまで連れてきていることの確信を持てないまま、「南のおつげ所」のウユララのお告げを伝え、グモルクに咬まれた傷が原因で、おさな心の君のひざもとでこと切れてしまうのである。

他方、バスチアンは、おさな心の君を助けてあげたいという気持はあるし、つけてさしあげる最もふさわしい名前も知っているのだけれども、ファンタージエン国へ行く道を知らない。それもそうだけれども、バスチアンには、他の誰でもないこの自分が真に求められている救世主であることの確信を、どうしても持つことができないのである。

そこで「おさな心の君」は、ファンタージエン国の運命山の頂に住んでいる「さすらい山の古老」のところへ自らたずねて行く。「さすらい山の古老」とは、『はてしない物語』の過去の全記録である。その彼に、『はてしない物語』を最初から最後まで一字一句全部もらさず語るよう命じたのである。驚いたことに、「さすらい山の古老」が語りはじめたのは、バスチアンが学校の物置部屋で読みはじめた『はてしない物語』・Ｂ本の始まり、「ハウレの森の動物たちは、皆、洞穴や巣や隠れ家に身をひそめていた。…」(27)というくだりからではなく、我々

が読み始めた『はてしない物語』・A本の始まり、「こんな字が、ある小さい店のガラスドアに書かれていた。…」[28]というくだりからだったのである。これによってバスチアンは、自分は『はてしない物語』の読者ではなく、つまり部外者ではなく、『はてしない物語』の登場人物であることを、はっきりと思い知らされたのである。そして、このままでは未来永劫、一字一句変わることのない過去の輪の中に、すなわち「悪魔の輪」の中に閉じこめられてしまうことを知ったのである。そしてバスチアンは、思わず知らず、

「月の子、僕、行きます。」[29]

と、叫んでしまったのである。その瞬間、多くのことが起こった。

「月の子！　月の子！　僕、行きます。月の子！　ほら、もう来ました。」しかし、ここはいったいどこなのだろう。わずかな光さえも見えなかった。まわりをとりまいているのは、もはやあの冷え冷えとした物置部屋の暗さではなく、びろうどのようにやわらかい暖かい暗さであった。[30]

こうして彼は、ファンタージエン国へやってきたのである。つまり彼は、学校の物置部屋から、更にファンタージエン国へ逃避したのである。

Ⅲ. 自己否定　自己忘却

「月の子、僕、行きます！」

と、バスチアンが叫んだのとほぼ同時に、学校の塔の時計が真夜中の12時を打つ音を、彼ははっきりと聞いていた。しかし彼は、これ以後、学校の塔の時計が1時を打つ音も、2時を打つ音も、3時を打つ音も聞いていない。この時計が時を打つのをバスチアンが再び耳にしたのは、9時を打つ音だった。

「お父さん！　お父さん！　――僕だよ――バスチアン――バルタザール――ブックスだよ！」[31]

と、叫んでいるうちに、どこを越えたのでもないのに、再び学校の物置部屋の中に居たのである。あたふたと帰り仕たくをしているうちに、学校の塔の時計が9時を打つのが聞こえてきたのである。この間、真夜中の12時少々過ぎから朝の8時すぎまで、物語としてはバスチアンは「月の子」のファンタージエン国へ行ったことになっている。ファンタージエン国へ行ったと言うと、我々にはわかりにくくて、何か狐につままれたような感じになる。しかし、話をわかりやすくするために、エンデには申しわけないけれども、バスチアンはこの8時間、学校の物置部屋の中で眠っていた、ということにしてもらおう。そうすれば、月の子・ファンタージエン国でのでき事は、バスチアンが眠って見てい

た夢の中のでき事である、ということになる。

では、エンデはバスチアンの夢の中での心の動きをどのような基本的構想にそって描くのであろうか。ここで、エンデが子安美知子氏に語った言葉を引用しておくことにしよう。次のエンデの言葉は、「外界を内界に換えて描く」とは、どうすることなのかということについて、我々の理解を助けることにもなるであろう。

子安　…とにかく創作のプロセスのことを、もう一度踏みこんで聞かせてほしいと思ってしまうのですが…。

エンデ　私がいつも試みるのは、中世の錬金術と似たやりかた、あるいは昔からメルヘンの語り手たちがやっていた方法、つまり私たちの外界の形象を内面世界の絵姿に翻訳するというか、変容させるプロセスです。外なる自然の風景が、私たちの内心の風景に移しかえられます。それをやってみると、おのずから一種の価値性が浮きだしてくるのです。そうとしか言いようがありませんね。いろいろな事物が、この翻訳によって内界の絵になりますと、とつぜん衝撃的なおそろしい姿になっていたりします。(32)

エンデは、このお話に続いて「『鏡の中の鏡』を書くとき、その金融システム（私注：現代社会の金融システム）を内界の風景におきかえてみたら、あの第四話、「途中駅」の絵になったのです」と言っている。つまり、この談話は、『はてしない物語』を念頭に置いて語られたものではないけれど、これから論究するバスチアンの夢の中の物語にも正にぴったりあてはまるのである。つまり、「月の子」・ファンタージエン国でのバスチアンの心の動き、立ち居ふるまいは、バスチアンの「外界の形象」を、すなわちバスチアンの家庭内の形象や学校内の形象を、「内面世界の絵姿」に、すなわち夢の中の世界の絵姿に「翻訳・変容」させたものなのである。

それではエンデは、バスチアンの月の子・ファンタージエン国での体験を、すなわちバスチアンの外界の形象の内面世界への翻訳を、バスチアンの心の成長の中で、どこに位置づけているのだろうか。すなわち、彼の成長にとっていかなる意味のあるものとして構想しているのであろうか。これについても、エンデ自身の言及がある。

テヒル　モモは痛みを味わうことによって花が枯れるものだということを悟る。モモはまた、繰りかえし新しい花があとで咲いてきて、新しい花のほうが前の花よりも美しく見える、ということも体験する。もしも、そういう痛ましい体験を何度もすることが許されないなら、わたしは、モモ

のようには悟れない。残念なことに、今日の教育システムは、これにとてもよく似ているわ。だって、子供は失敗してはならない。あるいは、許される失敗というのが、あまりにも少ない。いったい敗北したときどんな態度をとればいいのかしら？　痛みの体験を克服することを、どうやって学べばいいのかしら？

エンデ　ほんとうにそれはもっとも重要な問題なんだ。まわり道が必要不可欠であること。失敗にはらまれている神秘。ぼくのもうひとつの物語では、そういうことが中心テーマのひとつなんだ。バスチアンはじつにたくさんの失敗をする。厳密にいえば、ほとんど失敗だらけなわけだ。けれどもまさにそのおかげで、バスチアンはおしまいには、ちゃんとやれるようになった。このモチーフは新しくもなければ、ぼくの独創でもない。それはね、なかでもＥ．Ｔ．Ａ．ホフマンの『黄金の壺』のモチーフなんだ。(33)

もっぱらバスチアンの失敗のテーマが物語られているのは、XIII.「夜の森のペレリン」の章から、XXII.「エルフェンバイン塔の決戦」の章までにおいてである。では、章を追ってバスチアンの失敗の行為と意味を見てゆくことにする。

まず、バスチアンは自分の実像をどう認識していたのか、この点をはっきりさせておく必要がある。これがはっきり表現されているのは、話は少々さかのぼるが、VI.「三つの神秘の門」の章の中である。『はてしない物語』・Ｂ本を読みふけっている学校の物置部屋の中は、午後３時をまわると、心なしか少し暗くなってきていた。家ではお父さんが自分が居なくなっているのにそろそろ気づいたはずだとか、この物置部屋に自分を探しに誰か来はせぬかとか、少し不安になって、扉にちゃんと鍵はかかっているか、かんぬきはかけてあるか、確かめるために読書を中断して席を立ち、その物置部屋の中をぶらぶら歩いていた時である。

バスチアンは、ギクッとした。暗い隅で何かの姿が動いたのだ。もう一度よく見ると、それは半分くもっている大きな鏡にうつっている自分のぼんやりとした姿だった。彼は近づいていって、しばらくの間自分の姿をじいーっと見つめていた。でぶでエックス脚、おまけにこのチーズみたいな顔、どう見ても美しくはなかった。彼はゆっくりと頭を横にふって、大きな声で言った。

「だめだ！」

それから、マットのところにもどった。今はさっきより少しその本を顔に近づけなければならなかった。こうして彼は更に読み続けた。(34)

彼がはきすてるように言った「だめだ！」という彼のこの言葉を、我々読者はしっかりと受け止めておかなければならないのである。彼が否定しているのは、彼の姿だけではあるまい。鏡に映っている自分の容姿を通して、彼は自分の全存在を見ているはずである。そうすれば彼のこの「だめだ！」という言葉は、彼自身の全存在に対する彼自身の否定と嫌悪感の表現なのである。バスチアンは、ありのままの自分自身を愛することができないのである。

ところが、こうして再びマットの上に座って本を読んでいる姿が、まごうかたなくこのありのままの彼の姿がそのまま、ふたたび読みはじめた『はてしない物語』・B本の中の「魔法の鏡」の中にはっきりと映し出されるのである。こうして、彼の否定すべき現実界の全存在が、まずはおさな心の君のファンタージエン国の中へそっくりそのままとりこまれて行くのである。ただし、物語が「おさな心の君」のファンタージエンのお話まででは、大切なことは、バスチアンがアトレーユによって「魔法の鏡」の中で見られたていということ、換言すれば、バスチアンがアトレーユによってファンタージエン国へ連れてこられていたということであって、バスチアンが自分の存在に対して否定的な態度を示していたということではない。しかし、物語が「おさな心の君」のファンタージエン国の話から、「月の子」のファンタージエン国の話になると、バスチアンのこの自己否定的心情が話の進展を決定するきわめて大きな意味を持つことになる。XII.「夜の森ペレリン」の章から、XXIII.「もと帝王たちの都」の章までは、バスチアンがいかなる方法で、いかなる順序で自己否定を実行していくか、その自己否定が彼にいかなる結果をもたらすか、そしてそれが彼の心の成長にとっていかなる意味を持つのか、等々のことを心の絵姿で示す構想のもとで展開されたファンタジー・アクション・ドラマであると、言えるのである。このことを念頭において、この物語の筋を追うことにしよう。

「月の子！　月の子！　僕、行きます、月の子！　ほらもう、僕ここに居ます。」

しかし、ここはどこなのだろうか？

こうしてバスチアンはついに「月の子」のファンタージエン国にやってきたのである。さき程まで心をしめつけていた恐れも不安も、消えていた。体の重ささえも感じなかった。心地よい闇につつまれて宇宙を浮遊しているようだった。

「月の子、あなたはどこにいるのですか？」

「私はここですよ、バスチアン。……私はあなたのそば、そしてあなたは

私のそばに居るのです。」

「月の子、」彼はささやいた。「これは終わりなんですか?」

「いいえ、」彼女は答えた。「始まりなんですよ。……ファンタージエンはあなたの望みから新たに生じるのです。私をとおして、あなたの望みは現実のものとなるのです。」

「僕の望みからですって?」と、バスチアンは驚いてきき返した。

「わたしが、望みを統べたもう金の瞳の君と呼ばれていることは、知っているでしょう。」バスチアンには、甘い声が聞こえた。「あなたは何を望みますか。」……

「ぼく、もう一度あなたを見たいな、月の子。あなたが私を見つめたあの瞬間のこと、あなたはおぼえていますか。」(35)

月の子は、バスチアンの望みに応じてバスチアンの掌中に一粒の砂つぶを握らせる。それは、かろうじて残った「おさな心の君」のファンタージエン国のすべてであった。一粒の砂つぶは、一点の光となり、その一点の光は一粒の種子となった。その種子は発芽して、たちまち巨木となった。その巨木には、燐光をはなつえも言えぬ程美しい色とりどりの花々が咲き乱れ、火の粉のように無数の種子が降りそそいだ。そして、それらの種子が、各々また発芽して、たちまちのうちに、広大無辺の原始の森が成立したのである。

「さあ、名前をつけてごらんなさい!」と月の子はささやいた。

バスチアンはうなずいた。

「夜の森、ペレリン」と、彼は言った。

彼は、おさな心の君の目を見た。——そうすると、最初にまなざしをかわした時と同じことが今もう一度起きた。バスチアンは魔法にかけられたように身動きもせず、おさな心の君の目を見つめたまま、目をそらすことはできなかった。初めて見たあの時は彼女は今にも死にそうな病人のように見えた。しかし今は、ずっとずっと、はるかに美しかった。(36)

これが、病の癒えたというべきか転生したと言うべきか、女王「おさな心の君」、すなわち転生した女王「月の子」のお顔であった。

こうしてバスチアンは、「おさな心の君」=「月の子」との再会が叶ったわけである。重要なのは次の会話である。女王「月の子」はバスチアンに、あの時、なぜ、もっと早くファンタージエン国へやってきてくれなかったのかと尋ねる。バスチアンは、「恥ずかしかったから。」と答える。なぜ恥ずかしかったのか、と尋ねると次のように答える。

「あなたはきっと、だれかあなたにふさわしい人を待っていると思ったんです。」「ではあなたは？」月の子は尋ねた。「あなたは私にふさわしくないのですか。」「つまり、それは、」バスチアンはどもり、顔が赤くなるのがわかった。「僕が思うあなたにふさわしい人というのは、勇気があって、強くて、美しくて、――そう、王子さまとか、そんな人――とにかく、僕のような子ではない人です。」

バスチアンは、目をふせた。(37)

つまりバスチアンは、アトレーユによってあの「魔法の鏡」の中へ、つまりおさな心の君のファンタージエン国の中へ連れて来られたままの自分を、すなわち、「だめだ！」ときっぱりと自分で否定した自分を、依然として、ここ月の子のファンタージエン国の中へ持ち込んでいるのである。

そして、ファンタージエン国の中では、バスチアンの自分の容姿に対する自己否定観念がまず最初に翻訳されて、次のような絵姿となって現れて来るのである。

「バスチアン、あなたに見せたいものがあります。」彼女は言った。「私の目をごらんなさい！」

バスチアンは胸がドキドキし、少し目まいを感じたけれども、言われるままにした。

そうすると、彼女の金の瞳の中に、ひとりの人の姿が見えた。それははじめは小さく、遠い人影のようであったが、だんだん大きく、はっきり見えてきた。それは少年の姿だった、彼とほぼ同じ年頃の少年だった。しかし、その少年はすらりとしていて、驚くほど美しかった。誇り高く毅然とした姿勢、その顔は高貴で、面長で、男らしかった。東方の若い王子さまのように見えた。青い絹のターバンを巻き、銀糸でししゅうがほどこされている膝までとどく絹の上着を着ていた。脚には、上質の赤いもみ革の長いブーツをはいていた。そのブーツの先端は弓なりにそりかえっていた。背には、高い衿のついている銀色に輝くマントをはおっていた。そのマントは肩からたれて、床にまでとどいていた。この少年の一番美しいところは手で、その指はほっそりして上品であったが、同時に並々ならぬ力強さを感じさせた。(38)

月の子の金の瞳にうつっていたこの少年は、今のバスチアンの姿であった。背が低くてでぶ、エックス脚でおまけに顔色のさえないみにくい少年。バスチアンのこの否定されるべきいまわしい自己像は、彼の夢の中・ファンタージエ

ンの国では、彼の願望によって変容されて、その対極の姿をとって現れてくるのである。つまり、この変容の原動力となっているのは自己否定願望であり、いまわしい現実から逃れようとする心理的補償実現願望なのである。夢の中・ファンタージエン国でのバスチアンの願望の実現は、現実の自己の否定の実行なのである。

とにかくバスチアンは、救世主としてファンタージエン国へやってくるや否や、まず最初に自分の現実のみにくい容姿の否定を実行し、望むがままに自己を変容して実現したのである。しかしそれはファンタージエンの中でのこと、すなわち夢の中でのことにすぎなかった。それはそうであっても、バスチアンは、うれしさのあまり、「気が遠くなり、失神したようになった。」…バスチアンは驚きに酔いつつ、自分の手を眺めた。……バスチアンの指は、首からさがった金のメダルをもてあそんでいた。

そのメダルを眺め、あっと驚きの声をあげた。アウリンだ！　お宝、おひかり、おさな心の君の名代となる者に授けられるみしるしだ。月の子は、ファンタージエンのあらゆる生きもの、あらゆることがらを支配する権威を僕に残していったのだ。……

バスチアンは、長い間、互いに相手の尾をくわえ合い楕円形を形づくっている明の蛇と暗の蛇の２匹の蛇をながめていた。それからそのメダルを裏返した。意外なことにそこには銘が刻まれていた。それは独特の飾り文字で書かれた短い言葉だった。

汝　の
欲っする　ことを
な　せ[39]

「汝の　欲っする　ことを　なせ」という命令は、汝の欲っすることは何か、という問を内包している。従ってこの命令は、最終的にはバスチアンの最後の願望は何か、バスチアンの最後の意志は何か、という問にたどりつくのである。こうして、バスチアンは自分の最後の望みは何なのか、自分の最後の意志は何なのか、これを探す「おおいなる探索」の旅にたつことになったのである。それでは我々も、バスチアンにはないしょで、彼の心の旅に同行することにしよう。

１．でぶでエックス脚であったことの忘却

バスチアンは、自分が美貌であることをたのしんでいた。自分を賞讃してくれる人が自分のまわりに一人も居ないということは、そのたのしみを

少しもそこなうことはなかった。逆に、このたのしみを自分一人で楽しんでいることがむしろ喜びであった。自分を今まであざけり続けていた連中の賞讃など今の彼にはどうでもよかった。彼は同情の念さえ持って、連中のことを思い出していた。(40)

現実界の醜い不幸なバスチアンは、夢の中・ファンタージエン国では、美貌の王子さまに変容される。現実の世界のバスチアンとファンタージエン国の中のバスチアンは、明と暗の関係、ないしは暗と明の関係になっているのである。我々は、ファンタージエン国でのこの変容の原動力は、悲惨な現実の心理的補償願望であることを、上の引用文の中から読み取らなければならない。月の子・ファンタージエン国の物語は、XXIII.「もと帝王たちの都」の章までは、これを原動力として展開されて行く。

次に、この補償願望の満足が、バスチアンに何を結果するのか、このことを見ておかなければならない。『はてしない物語』は上の引用文に、すぐ次のように続いて行く。

季節の移り変わりもなく、昼が夜にとって変わることもないこの森の中では、時間の感覚がこれまでとは全くちがっていた。だから、いったいどれくらい長い間この森の中を歩きまわっていたのか知らなかった。しかし、自分の美しさを喜ぶ気持に少しずつ変化があらわれてきていた。つまり、自分は美しいのだということは、彼には自明のこととなったのである。美しいということをしあわせに思う気持が少なくなったわけではない。美しくない自分など、もともと存在しなかったのだと思いはじめていたのである。…つまり、望んで叶えられた美しさの代償として、かつてはでぶでエックス脚だったことを、次第に忘れていったのである。……しかし、この忘却は彼が全然気づかないうちに進行していった。この記憶が完全に消えてしまった時、彼は自分は昔からそうだったのだと思っていた。正にそのせいで、美しくありたいという願望は癒されていた。なぜなら、もともとそうだったものが、そうありたいと望みはしないからである。

こういう心理状態に達するか、達しないかのうちに、バスチアンは早くも何かもの足りない気持になり、新しい望みがつのってくるのを感じた。(41)

ここで重要なのは、ファンタージエン国で美貌の王子さまに生まれかわったことの代償として、彼は現実の世界ではでぶでエックス脚の少年だったこと、つまり醜い少年であったという現実を忘れてしまった、ということである。更に困ったことには、自分が自分の現実を忘れてしまったということに、全然気

づいていない、ということである。現実を忘れるということは、心理的にその現実を消すということであり、その消された部分には空虚・虚無が生ずることになる。これが進行して行くといくことは、バスチアンの現実が虚無化して行くということだ。これが完全に進行してしまえば、現実のバスチアンは完全に虚無化してしまう。つまり心理的に屍になる、ということである。バスチアンは、ファンタージエン国での表向きのかっこうのよさとは裏腹に、XXIII.「もと帝王たちの都」の章を通過するまでは、この心理的な死への道をたどることになるのである。しかし、かなえられるはずもない願望が次々と、しかも一点の非のうちどころもなく、完璧な形で実現されてゆく痛快さに有頂天になっているバスチアンは、しかもこの真実に気づくことのできなかったバスチアンは、自分の意志でこの道を進むことを断念することはできなかった。この道を破滅するまでとことん突進するしかなかったのである。これは正に愚行であった。これがエンデが言っているように、失敗でなくて何であろう。

2．弱虫で不器用だったことの忘却

美しくありたいという望みが満たされると、美しいだけではだめだ。強くなくてはならない。強くなりたい！　一番力持ちになりたい！　という欲望が頭をもたげた。この時、「夜の森ペレリン」は、巨木の密生する密林に生長していた。バスチアンは巨木をかきわけ、道なきジャングルを息も切らさず進むのがたまらない程たのしかった。高い木の枝からたれているつるをつかむと、足もかけずに左右の手を交互に上へ運んで、するする登った。何十メートル登っても、まだてっぺんに到らない巨木をスルスルと軽業師のように登ることもできた。バスチアンはジャングルで一番高い木に登って、まわりを見まわした。バスチアンは、「夜の森ペレリン」の王であった。こうして、強くなりたいという望みも満たされ、自分の力強さに満足した。

> 夜の森はもはや変化しなくなっていた。このことは、彼の願望が満たされてしまったことと関係しているということにも、同時に自分の弱さや不器用さの記憶も消えてしまったことにも、彼は、気づかなかった。(42)

3．神経質で愚痴っぽかったことの忘却

この時、バスチアンは思った。美しいということも、力が強いということも、粘り強く、スパルタ式に鍛えられてはじめて価値を持つのだ。粘り強くなりたい。そうだ、大きな砂漠を行く、これこそいばっていいことだ！　こう思って

いると広大無辺の「夜の森ペレリン」は、夜が明けはじめた。夜が明けて行くにつれて、色とりどりの花が咲きみだれていた「夜の森ペレリン」の樹木は、砂となって壊れ落ちていった。すっかり夜が明けてしまった時には、「夜の森ペレリン」は広大無辺の砂漠に変わっていた。バスチアンは、この砂漠に、「色とりどりの砂漠ゴアブ」と名づけた。

砂山を登り、砂をふみしめてくだり、行けど行けど、色だけが変化するだけだった。この砂漠の広さは力で征服できるものではなかった。バスチアンのとほうもなく強い体力も、この砂漠では役立たなかった。空気は焦熱地獄の炎のようにゆらめき、ほとんど息をすることさえできなかった。体の水分はぬけ、血は血管の中で濃く固まり流れなくなってしまったのではないかと思われた。バスチアンはそれでも進んだ。バスチアンは群青色の砂丘にさしかかった。谷をへだてた隣の砂丘は炎のように赤かった。バスチアンは隣の砂丘から赤い砂を手ですくってきて、青い砂丘の上に赤い砂で自分の名前をＢ　Ｂ　Ｂと、三つの文字で描いた。バスチアンは炎のように赤い砂の丘の上に腰をおろして、満足そうに灼熱の太陽を受けて赤く輝くＢ　Ｂ　Ｂをながめていた。その時、人間界からやってきたバスチアンの記憶の一部がまたもや消えた。自分はかつては神経質で、時にはむしろぐちっぽかったことを彼はもはや知らなかった。自分の粘り強さと不屈の強さを誇らしく思った。しかし、早くも次の欲望が頭をもたげていた。(43)

４．臆病だったことの忘却

彼は思った。欠乏に耐えることができるとか、辛苦を克服することができるということは、それはたいしたことだ。しかし、大胆さとか勇気とかは、また別だ！　とてつもない勇気が必要な大冒険に出会いたいものだ。そう思った時、地なり・地ひびきと共に巨大なライオンが出現した。このライオンはこの「色とりどりの砂漠ゴアブ」の主、「グラオーグラマーン」だった。ゴアブの本質は、火であり死である。それ故、グラオーグラマーンの本性も火であり、死である。グラオーグラマーンと出会う者はすべて燃えつきて死ぬ。しかし、バスチアンはアウリンに守られて、グラオーグラマーンを屈服させて、忠実なしもべとする。バスチアンは、毎日毎日、グラオーグラマーンの背にまたがり、ゴアブを疾駆したり、グラオーグラマーンとレスリングをしたりして遊ぶ。そしてグラオーグラマーンの住処で、火の食事を取り、火のふろで湯あみをする。

ある日、グラオーグラマーンは一振の剣をくわえてきて、バスチアンに差し

出して、その剣に名前をつけてくれるようにたのむ。バスチアンは、その剣を「シカンダ」と名づけて呼ぶ。そうすると、シカンダはひとりでに浮遊してきてバスチアンの掌中におさまり、バスチアンのものとなったのである。この剣は魔法の剣である。ファンタージエン国でこれに刃向かうことのできるものは何一つない。しかしバスチアンがこの剣を使うことが許されるのは、この剣みずからさやから抜け出してきて、みずからバスチアンの手におさまる時だけである。そうでないのに、バスチアンが自分の意志でこの剣を抜いて使えば、この剣はバスチアンとファンタージエン国に大きな禍をもたらす。このことをけっして忘れないように、とこんこんと言いふくめて、グラオーグラマーンはバスチアンにこのシカンダを手わたしたのである。つまりシカンダは両刃の剣なのである。敵をも打倒すけれども、時によってはバスチアンとファンタージエンに禍をもたらすこともある。アウリンを授かっているバスチアンであろうとも、やってはいけないことがあるのだ。それは後になればわかる。

グラオーグラマーンはバスチアンに「汝の　欲する　ことを　なせ」ということは、やりたい放題にやれという意味ではなく、「真の意志を持て」(44)という意味で、真の意志を探し出すためには、この上ない誠実さと細心の注意が必要であることをも諭す。

> このころまた、バスチアンに変化が生じた。月の子と出会って以来彼にさずけられたいろいろな能力のうえに、更に勇気が加わったのである。そしていつものように今回もまたそれに代わってあるものが取り去られた。それはすなわち彼が以前は臆病だったという記憶である。
>
> こうして何ひとつ恐れるものがなくなった今、初めは気づかなかったが、時とともに次第にはっきりと新しい望みが姿を現してきたのである。バスチアンはもはやひとりぼっちでは居たくなかった。色とりどりの死・グラオーグラマーンとは一緒だったけれども、ある意味では彼はやはり孤独だった。バスチアンはやっぱり自分の能力を人前で見せびらかしたかった。感嘆され、名誉をかちとりたかった。(45)

5．子供だったことの忘却

月の子ファンタージエン国は、バスチアンの願望によって生成する世界である。バスチアンに新しい願望が生まれれば、バスチアンをとりまく世界は、その願望の実現に最もふさわしい環境を形成する。

バスチアンに、自分の能力を人まえで見せびらかしたい、感嘆されたい、名

誉をかちとりたい、という願望が生ずるや否や、バスチアンは、グラオーグラマーンに別れをつげ「千の扉の寺」の中へと進むことになる。彼はこの寺の中の部屋から部屋へさまよっているうちに、自分の願望は、友としてのアトレーユに再会することであることを知る。これを知るや否や、彼は「千の扉の寺」から出て森の中へと進んで行くことになる。

森の中をさまよっていると、ルン国の姫君オグラマール姫、姫につかえる恋人勇士ヒンレック、後からこの二人に加わった勇士ヒクリオン、ヒスバルト、ヒドルン、都合５人の旅の騎士団に出あう。彼らの話によると、ただ今ファンタージエン国の救世主バスチアンが行方不明で、彼を探し出し護衛する勇士を三人選抜することになった、その三人を選抜するため、ファンタージエン国で最も美しい銀の都アマルガントで、国中の勇士を集めて格闘技トーナメント大会が開催される。審判長は緑の肌族のアトレーユだ。この四人の騎士もこのトーナメント大会に参加するためアマルガントへ行くところだ、というのである。バスチアンにとってはこの上なく好都合な話だ。バスチアンは、自分の名前も身分もふせて、この五人に加わって旅を続け、アマルガントへたどりつく。

格闘技トーナメントで勝ち残ったのは、勇猛のヒクリオン、剣術の達人ヒスバルト、耐久力のヒドルンだった。この時、やおらヒンレックが立ちあがり、この三人をたばにして一度にお相手しようと挑戦する。ヒンレックは一度に三人を倒して、ファンタージエン国最強の勇者であることを、オグラマール姫の前で力を示す。ここで、バスチアンはヒンレックに挑戦する。シカンダがひとりでにバスチアンの手におさまり、その助けによりヒンレックのかぶともよろいも粉々に、ズタズタに打ち砕いて降服させる。こうしてバスチアンは、最も名誉ある形で友人アトレーユと再会し、ファンタージエン国のすべての勇士の居並ぶ面前で、我こそはファンタージエン国の救世主バスチアンであると名のりをあげ、理想的な形で最高の名誉を勝ち得たのである。

これ以後、バスチアンは、友人としてのアトレーユとフッフール、従者としてのヒクリオン、ヒスバルト、およびヒドルンと行動を共にする。その夜、バスチアンはアトレーユと寝室を共にして、女王「月の子」と会ったこと、女王からアウリンを授けられたこと、火のライオン、グラオーグラマーンとレスリングをしたり、その背にまたがってゴアブを疾駆したりしたことなどを語ってきかせる。バスチアンの期待ははずれて、アトレーユはそんなバスチアンに冷淡とも受け取れる程、冷静だった。否、むしろ憂慮のおも持ちで耳をかたむけていたのである。これは、バスチアンにとっては非常にショックだった。全ファ

ンタージエン国の勇士の面々に賛嘆されるよりも自分と同じ年頃のアトレーユに賛嘆してもらいたかったのだ。そうでなければ、現実の世界で、学校で、学校友だちからさんざん馬鹿にされ、さんざんいじめられていたことに対する心理的補償が実現されなかったからで、そうでなければ、学校で受けた彼の心の傷は、癒されなかったからである。

それはそうとして、それではなぜ、アトレーユはバスチアンの英雄的なわざに冷淡・冷静で憂慮しているのか。それは、アトレーユは、バスチアンのファンタージエン国での願望の実現はバスチアンの現実の世界の記憶の喪失を代償として達成されているのだということ、そして、もしもバスチアンが現実の世界の記憶を完全になくしてしまえば、バスチアンはここファンタージエンの世界から現実の世界へ帰って行くことはできなくなるのだということを、知っていたからである。アトレーユが「月の子」・ファンタージエン国へやってきた使命は、バスチアンが彼の現実の世界での記憶を完全に喪失してしまわないうちに、彼をファンタージエンの世界から再び現実の世界へ送り出してやることだったからである。

そんなこととはつゆ知らぬバスチアンは、どうしたらアトレーユの賛嘆を勝ち得ることができるだろうかと、考えている。アトレーユがアウリンを持っていた頃の彼でさえすることのできなかった類のすばらしいことをしたら、きっと賛嘆してくれるにちがいない、それにはどうしたらいいであろう、そうだ、すばらしい物語を作ることだ、これこそはアトレーユができなかったことで自分が最も得意とするところだ。こう思いついた時、彼は眠りに落ちた。その絶好の機会は、さっそくその翌日おとずれる。アマルガントの銀翁ケルコバートは、救世主バスチアンのために歓迎会を催したのである。アマルガントの最も優れた歌人や語り部の演技でおもてなしをした後で、できればバスチアン様にもすばらしいお話を、ひとつ語っていただけまいか、ということになったのである。待っていました！　とばかり、バスチアンは『アマルガント図書館の物語』という話を、即席で創作して朗読する。それによると、昔々、アマルガントの町は滅亡の危機に瀕した。その危機を救ったのは、ファンタージエン国で最も醜い、「常泣き虫・アッハライ」だった。その時の救済条件が、アマルガントの子孫は全員、語り部または歌うたい人になる、ということだった。そして、アマルガントの代々の語り部たちが語った物語やうたった歌を集め保存してあるところが『アマルガント図書館』だ、というのである。バスチアンのこの物語は、銀翁ケルコバートならびにアマルガントの語り部や歌人たちの心からの

賞讃を勝ちとった。不思議なことに、このアマルガントの町には、今まで誰ひとりとしてその扉を開けることはできなかったけれども、実際に「アマルガント図書館」は存在するというのだ。バスチアンとアトレーユは、銀翁に案内されて、その図書館へ行く。バスチアンが初めてその扉を開けて中へ入ると、何階分も高い壁に、ぎっしりと本がつまっていて、その部屋の床には「バスチアン・バルタザール・ブックス全著作図書館」と書いてあったのである。

アトレーユは目をまん丸く見開いて、まわりを見まわして立ちつくしていた。彼はすっかり驚き賛嘆している様子であった。それが彼の表情にありありと出ていた。バスチアンは、それを見てうれしかった。(46)

こうしてバスチアンの願望は満たされたのである。

バスチアンは、アトレーユとフッフール、それから3人の従者ヒクリオン、ヒスバルト、ヒドルンを連れて、銀翁に別れをつげて旅に出る。旅に出ると、ファンタージエン国のありとあらゆる種族の使者が集まってきて、たちまち大群の行列になる。彼らはことごとく、バスチアンのすばらしい物語を創作する才能を噂でききつけ、自分たちにも自分たちの種族の起源の物語を作ってもらおうとして、派遣されてきた者たちだったのである。しかし、この頃、バスチアンの心の中にはまた新しい願望が頭をもたげはじめていた。物語をつくって怪物や怪獣の創造者として有名になるよりは、「善人」とか、「偉大なる徳行の人」として人々から尊敬され、あがめたてまつられたい、という欲望だった。

その旅の途中、ある日の夜、バスチアンたちの一行は、広くて深い洞窟の中で夜をあかすことになる。その真夜中、その洞窟の奥深くから世にも悲しそうな無数のすすり泣く泣き声が聞こえてきたのである。実はその洞窟は、ファンタージエン国で最も醜い生き物である「常泣き虫アッハライ」たちの住処であった。アッハライたちは、その姿の醜さ故に一生の間泣き暮らし、彼らの涙で銀の鉱脈を洗って銀を取り出し、その銀で銀の都アマルガントの銀の細工をすべて、彼らがここで作っていたのである。彼らは涙ながらにバスチアンに懇願する。

「おお、偉大なる慈善者よ、」アッハライたちは大声で言った。「アウリンの保持者よ、我々を救済する力の保持者よ、我々の願いはたったひとつです。なにとぞ我々にほかの姿を与えたまえ！」

「その願いはかなえてあげよう、安心するがよい、かわいそうな者たちよ。…おまえたちはあすの朝目をさませば、その殻をぬけ出して、蝶になっ

ているのだ。おまえたちは見目美しく愉快になっているだろう。そしておまえたちの一生は笑いと楽しさだけになるであろう！　明日からは、おまえたちはの名前はもはや常泣き虫・アッハライではない、のらくら常笑い虫・シュラムッフェンだ！」(47)

しかし、アトレーユは喜ばなかった。

「君は、また記憶の一部をなくしたね。」アトレーユは真剣な表情で言った。「今度は、アッハライをシュラムッフェンに変えてやったからだ。あんなことは、してはいけなかったのだ。」(48)

フッフールまでが、バスチアンに、今後は二度とアウリンの力を使わないで下さい、さもなければバスチアンは記憶を全部なくして、元の世界へ帰ることが出来なくなる危険があります、と忠告する始末であった。

アトレーユもフッフールも、バスチアンを、無邪気でお人よしで保護を要する子供と見なしていることは、疑いもなかった。バスチアンには、自分が子供扱いされることは許せなかった。バスチアンは思った、なんとかして思い知らせてやらなくては！　皆から、戦々恐々と怖れられ、用心される存在になりたい！　バスチアンはこう願ったのである。

この頃、彼らの旅の行く手に女魔術師クサイーデの住む魔の城、ホローク城が現れる。クサイーデは、バスチアンの従者ヒクリオン、ヒスバルト、ヒドルンを捕らえて、ホローク城の地下牢の中に幽閉する。バスチアンは１人で城にのり込んで、攻めよせて来る黒ブリキの兵士たちをシカンダを振ってバッサ、バッサと切りすてて、３人を救い出す。クサイーデはバスチアンに降服し、忠誠を誓う。しかしこれは、クサイーデがバスチアンにとり入るために仕組んだ罠であった。クサイーデは、バスチアンを永遠にファンタージエン国に閉じこめ、現実の世界への帰還を阻止せんとする女魔術師だったのである。バスチアンはクサイーデのたくらみに気づかず、彼女を側近の従者に取りたてて、共に旅を続ける。クサイーデは、バスチアンに旅の乗り物として、５人の黒甲冑男によってかつがれる赤サンゴ製の輿を提供して、ラバのイハを捨てるように進言する。アトレーユはクサイーデのたくらみに気づいて彼に警告する。

「これはみんなこの女の計画なんだよ、バスチアン。君の勝利は、実のところ君の敗北なんだ。この女は自分の手管で君を自分のものにするため、わざと君を勝たせたんだよ。」

「やめろ！」バスチアンは怒りで顔をまっ赤にしてどなりつけた。「君の意

見なんか聞いてはいないのだ！　説教ばかり聞いていると、気が変になる！今度は僕の勝利にけちをつけ、僕の寛大さを笑いものにする気か？　……だまれ！僕のすることにかまわないでくれ！　僕のすることなすこと、それが気に入らないなら、君たち二人ともすきなようにするがいい！　止めはしないさ、さあ、どこへなりと行くがいいさ！　君たちの顔なんかもう見たくもない。」(49)

こう言ってバスチアンは腕組みしてアトレーユに背を向けたまま、二度とふりかえらなかった。しかたなくアトレーユとフッフールは、バスチアンのもとから立ち去って行った。この瞬間、バスチアンの心の中からは、自分の世界では自分は子供だったという記憶さえも消えてなくなってしまったのである。

6．学校へ通っていた記憶の喪失

学校の物置部屋で本を読んでいた記憶の喪失

今やバスチアンの旅の目的地はエルフェンバイン塔であり、その目的は女王「月の子」と再会することであった。その旅の隊列の先頭には５人の黒甲冑男にかつがれている赤サンゴ製のみ輿が立ち、そのみ輿の上にはバスチアンと並んでクサイーデが座っていた。アトレーユとフッフールは、隊列の最後尾について、トボトボと歩いていた。

クサイーデは、バスチアンの真の危険はバスチアン自身の心の中にある、なぜならば、バスチアンは未だにバスチアンとフッフールに対する友情を捨てきっていないからだ、バスチアンが真に最強であるためには真に賢くならなければならない、と耳もとでささやく。

夜営のキャンプが張られた時、バスチアンはひとりテントの中に入って、クサイーデの言ったことを真剣に考える。

……賢いということは、喜びも悩みも、不安も同情も、名誉欲も侮辱も、すべてを超越しているということだ。本当に賢者である者は、何をどうするなんてことはなくなるのだ。そうだ、これこそ本当に望むにあたいすることだ！　バスチアンは、これでいよいよグラオーグラマーンが言った最後の望みにたどりついたにちがいない、と思った。……僕は偉大な賢者でありたい！　ファンタージエン国中で最も賢い賢者になりたい！(50)

バスチアンはテントから屋外へ出た。空は雲ひとつなく、満天に星々がきらめいていた。その時、６羽のフクロウがバスチアンのそばに音もなく降り立った。それは、星僧院ギーガムからの使者であった。ギーガムの３人の僧院長が、

是非とも「おおいなる知者」バスチアン様から御教導を賜りたいというのである。６羽のフクロウに案内されて、空を飛んで星僧院にたどりつく。早速、講堂に案内されると、そこにはファンタージエン国のあちこちからやってきた生きものである僧たちがつめかけていた。正面の一段高い石壇の上には、この僧院の３人の院長が座っていた。それは、フクロウの頭をしている予感の母ウシュトゥー、鷲の頭をしている観照の父シルクリー、狐の頭をしている怜悧の息子イージプーであった。バスチアンはこの３人に向かい合って、玉座のように立派な椅子に腰をおろす。静寂が満ちていた。中央の座を占めていたシルクリーがやおら口を開く。彼らは太古の昔から世界の謎について沈思黙考してきた。しかし、３人の見解が異なっていて、結論に到達できなかった。それで、おおいなる知者バスチアンさまに、お教えをいただきたい、というのである。沈思黙考師とバスチアンとの問答は、１日に一問一答ずつ、３日間におよんだ。

第１日目の問答はこうだ。

「いかなるか、これ、ファンタージエン？」

「ファンタージエンとは、はてしない物語なり。」

第２日目の問答はこうだ。

「ファンタージエンがはてしない物語ならば、しからばそのはてしない物語は、いずこに書かれてありや？」

「あかがね色の絹装丁本の中にあり。」

第３日目の問題はこうだ。

「我々の世界ファンタージエンがはてしない物語であり、そのはてしない物語があかがね色の本の中にあるならば、しからばその本はいずこにありや？」

「学校の物置部屋の中にあり。」

「あえてお願い致したい。この真理を我々の目に見せてはくださいませんか？」

「よろしい。……明晩同時刻に集まることにしよう。」

あくる日の夜、星僧院の３人の院長と僧全員が僧院の屋上に立ち、星空を見つめていた。バスチアンは、アマルガント図書館の扉から持ってきた一角獣の角の石をポケットから取り出して、高くかかげると叫んだ。

「リハスト　ラー！」

その瞬間、ものすごく明るい閃光が走り、星々はことごとく色あせ、暗い宇宙の奥まで照らし出された。その宇宙は黒ずんでがっしりした梁のある

学校の物置部屋だった。……

シルクリーが言った。

「ただ今は、悟りのひらめきをいただき、お礼の言葉もございません。……」

バスチアンは、この夜を境に、自分がかつては学校に通っていたという記憶を失った。学校の物置部屋の記憶も、盗んできた赤がね色の絹で装丁された本の記憶も失ってしまった。そして、自分がどういうふうにしてファンタージエン国へやってきたのか、疑問にさえも思わなくなった。(51)

こうしてバスチアンは、ファンタージエン国で最も賢い者になりたい、最も賢い者になってみせるぞという、彼の考え得る最後の願望＝最後の意志を実現したものと思ったのである。彼は今は、美しい東方の王子さまであり、力は強く勇気もあり、忍耐強くかつ徳行の人であり、その上、超然たる雰囲気をたたえている最高の賢者でもあった。そして、ファンタージエン国のありとあらゆる種族のありとあらゆる住人から、最大級の称讃と名誉を勝ち取って崇められたのである。しかしそれは、ファンタージエン国の中、すなわち夢の中での話にすぎなかったのだ。それと全く対照的に、現実の世界のバスチアンからは、自分が醜い少年だったこと、弱虫でのろまで不器用だったこと、神経質でぐちっぽく臆病だったこと、学校友だちからはばかにされいじめられて苦しみ悩んでいたこと、自分が子供であったこと、学校へ通っていたこと、学校の先生たちやコレアンダー氏など、身のまわりの大人に対しては恐怖心を持っていたこと、等々の現実の記憶がことごとく忘れ去られていたのである。今、現実のバスチアンに残っているのは、自分の名前と父母の記憶だけであった。現実のバスチアンは、完全に虚無化される寸前だったのである。おさな心の君のファンタージエン国に虚無が拡大していったと同様に、今度はバスチアンの現実の世界に虚無がどんどん拡大して、今はもう完全に虚無と化する寸前まできていたのだ。おさな心の君が瀕死の重病人だったと同様に、現実界のバスチアンは瀕死の重病人だったのだ。そして、この原因はバスチアン自身の願望・意志だったのである。今やファンタージエン国のバスチアンは、現実界の自分自身を完全に殺してしまう寸前のところまできていたのである。

しかし、本当に重要なのは、瀕死状態の現実界のバスチアンであって、これ以上望むべくもなく功をなし、名をとげたファンタージエン国の中、夢の中のバスチアンではなかった。しかし、ファンタージエン国の中に居る今のバスチアンには、現実界の中の自分自身の本当の姿・状態は全く見えなくなっていた。彼は、何としてもあの悲惨な現実界は忘れてしまいたかったのである。そして、

「汝の　欲っする　ことを　なせ」という銘が刻まれているアウリンは今も確かに彼の首にかけられ、胸の上にあったのである。

しかし、おさな心の君＝月の子がバスチアンに授けたアウリンが主導権を握っているのはひとまずここまでであった。次のXXII.「エルフェンバイン塔の決戦」の章では、アウリンは沈黙し、シカンダがものを言うことになる。

IV. 死

こうして、ファンタージエン国で数々の偉業をなしとげ、最高の知恵者となり、ファンタージエン国のありとあらゆる種族の住人から崇められるようになったバスチアンは、自分を女王・月の子と同等なものと見なすようになり、対等な者として、女王・月の子に是非とも再会したいと思うようになっていたのである。実際、バスチアンたちの旅の一行は、やがてエルフェンバイン塔に到達したのである。しかし、エルフェンバイン塔の中心のモクレン宮の中には、女王・月の子はおいでにならない、という情報が寄せられた。そのため、バスチアンはエルフェンバイン塔へ入城するのをためらっていた。その時、クサイーデがバスチアンの耳もとでささやいたのである。

> 「おさな心の君は、ご自分の全権のしるしをわが君さまにおさずけになったではありませんか。おさな心の君はわが君さまにご自分の王国をおまかせになったのです。今やわが君さまがおさな心の君におなりになるのです。これはわが君さまの当然の権利です。わが君さまはファンタージエン国へおいでになってファンタージエン国をお救いになったばかりでなく、それを太初から創造なさったのはわが君さまなのですから。私どもは皆――この私自身も含めて――わが君さまがお造りになったものなのです。わが君さまは、偉大なる知恵者でいらっしゃいます。今や当然わが君さまのものである全権を、ただ手をのばして握ることに、なに故そのように驚きになるのですか。(52)

そしてバスチアンはついに、今から77日後にみずから、ファンタージエン国の帝王に即位する、と宣言したのである。そしてこのことは、ファンタージエン国全土に布告され、即位式の式典の準備は、クサイーデによって取りしきられて、ぬかりなく進められたのである。しかし、女王・月の子、望みをすべたもう金の瞳の君は姿を現さなかった。そして、女王の玉座のある白モクレン宮へ到る道は、バスチアンがどんな手をつくしても登ることはできなかった。白モクレン宮へたどりつく道は、バスチアンがどんなに望んでも、授からなかっ

たのである。そのため、即位式の日にバスチアンが即位する玉座は、エルフェンバイン塔を登りきって白モクレン宮の正門にたどりついた所に、つまり白モクレン宮のすぐ外にしつらえられた。

ついに即位の日がやってきた。即位の儀式はファンタージエンの全国の表敬使節団の見守る中、けばけばしくもきらびやかに、延々と続いていた。その最中に伝令が駆け込んできて、式典は途中で大混乱に陥ってしまったのである。アトレーユが3軍団を率いてこちらに向かっていて、バスチアンにアウリンを渡すよう、要求しているというのである。既に戦闘は始まり、アトレーユの率いる軍勢は、徐々にエルフェンバイン塔を登り、バスチアンの玉座のしつらえられている白モクレン宮のふもとの正門へと迫ってきたのである。ほどなく、アトレーユの率いる軍勢はモクレン宮のふもとの正門の中へなだれ込み、バスチアンの玉座は粉々に砕かれてしまう。バスチアンとアトレーユは、白モクレン宮にめぐらされている城壁の上の通路で、ついに遭遇する。

> 2人は睨み合ったまま、相対した。シカンダは動かなかった。アトレーユは剣の切っ先をバスチアンの胸もとに突き当てて言った。
> 「さあ、そのおしるしを僕に渡したまえ。君のためなのだ。」
> 「うら切り者！」バスチアンはどなりかえした。「とれるものなら取ってみろ！」バスチアンはシカンダのつかに手をかけ、怪力で無理やりさやから引きぬいたのである。シカンダはこの時は、けっして自らさやからぬけてバスチアンの手におさまったのではなかった。…バスチアンはアトレーユに切ってかかった。アトレーユは自分の剣で防ごうとしたが、シカンダがその剣を砕き、アトレーユの胸を突いた。深い傷が口をあけ、血が吹き出した。アトレーユはよろよろと後じさりし、大門の狭間から墜落した。(53)

この時、アトレーユはフッフールに助けられる。そして、バスチアンの銀色のマントはまっ黒に変わっていた。やがて、エルフェンバイン塔も白モクレン宮も炎につつまれて崩れ落ちる。それを見て、バスチアンは逆上して叫ぶ。

> 「こんなことになったのはすべてアトレーユのせいだ！　ようーし、世界のはてまで追ってやるぞ！」
> 彼は黒ブリキの巨大な馬に飛び乗ると叫んだ。「おれにつづけ！」
> 馬は棒立ちになった。しかし彼は意志の力で馬を駆りたて、全速力で夜の闇の中へ突っ込んで行った。(54)

この文面から判断すれば、この戦いでの勝者はバスチアンで、敗者はアトレーユであるように思われる。しかし、真実はこの逆である。この戦いの時、魔法

の剣シカンダは、けっして自ら抜けてバスチアンの手におさまったのではない。バスチアンは、グラオーグラマーンの警告に反して、抜けてこないシカンダを、無理に力づくで抜いてしまったのである。これによってバスチアンは、自分自身とファンタージエン国に禍を招いたのである。こうして、エルフェンバイン塔も白モクレン宮も灰塵に帰し、この時戦死していたのはアトレーユではなく、実はバスチアンだったのである。この真実は、これに続く物語の中で次第に明確になる。ファンタージエン国のバスチアンは今、それとは知らずに死出の山路へ旅立ったのである。

バスチアンは、クサイーデの作り出した黒ブリキの巨大な馬を駆って、衝動的に闇の中を突進する。その途中、黒ブリキ馬は分解してしまう。バスチアンは、砂の中から立ちあがると、こんどは徒歩でまた衝動的にただひたすら闇の中をつき進む。夜のあけがた、バスチアンは「もと帝王たちの町」にたどりつく。バスチアンはその町の管理人、猿のアーガックスにつかまえられて、なかば無理やりに町の中へ案内される。町なみは混乱そのものだった。住人はすべて、人間界からファンタージエン国へやってきた者だったが、自分本来の現実界へもどる前に、自分たちの現実界の記憶をすべて失ってしまった者たちであった。もはや彼らには願望も意志も全く持っていなかった。言葉さえも失っていた。彼らの行動は、無意味そのものだった。何をたずねても返事はなかった。

「彼らにたずねても無駄だよ。」アーガックスのキャッ、キャッ、言う声が聞こえた。「彼らはもはや一言も云うことさえできないのだよ。まあ、無言人間と名づけることも出来るだろうね。」(55)

彼らはまさに生ける屍であった。彼らの様子を見て、バスチアンは人間界からファンタージエン国へやってきた者が、ファンタージエン国の帝王になることの意味を理解し、アトレーユの忠告をここでやっと理解したのである。

「アーガックス、教えてくれ、僕はどうすればいいんだろう？」

「あんたの世界にあんたを連れもどしてくれる願望を一つ見つけ出すことさ。」(56)

バスチアンは、この「もと帝王たちの町」をぬけ出し、荒野をさまよう。その途中バスチアンは、自分の暴力でシカンダを引き抜き、アトレーユに向かってふるったことを後悔して、シカンダを腰からはずして、砂の中深くに埋める。それからまた、たった１人で、嵐の荒野をさまよう。バスチアンは、淋しくて淋しくてたまらなかった。今やもう自分は君主や勝利者なんかでなくてもいい、自分が一番だめな者であってもいい、とにかく一緒にいてくれる仲間が欲しい

と思った。バスチアンはやがて霧の海にたどりついた。その海辺の町はイスカールと言い、その町の住人はイスカールナリと呼ばれていた。

彼らの間ではスカイダンと呼ばれていた霧の海は、ファンタージエン国を二つに分けている白いもやの太洋だった。(57)

つまり、ファンタージエン国には二つの世界があったのだ。此岸と彼岸。バスチアンはついに、ファンタージエン国を此岸と彼岸に分けている境界の大海のほとりにたどりついたのだ。イスカールはファンタージエンのこの世からあの世へ旅立つ港町だった。やっぱりバスチアンはエルフェンバイン塔の決戦で既に戦死していたのだ。バスチアンはイスカールナリに頼んで、彼らの船に乗せてもらって、いよいよイスカールの町を後にして、霧の海を渡る航海に出た。バスチアンはついに、ファンタージエンの生者の国を後にして、死者の国へ向かって旅立ったのである。こうしてバスチアンは、ファンタージエンの国で死亡したのである。

V．転生

霧の海スカイダンの船旅から、ファンタージエン国の中でのバスチアンの転生・再生の旅が始まる。そしてこの転生の旅が、バスチアンが「最後の意志・真の意志」を探し出す「おおいなる探索」の旅の最後の行程になる。バスチアンの首には、まだ、「汝の　欲する　ことを　なせ」という銘が刻まれているアウリンがぶらさがっていた。ということは、彼はまだ彼の最後の意志・真の意志を発見していないということである。彼は「おおいなる探索」の旅を更に続けなければならないのである。

イスカールナリの船は不思議な船だった。帆もなければ櫂もない、スクリューもなければ舵もない、イスカールナリの水夫たちの想念を動力として航行するのである。更に不思議なことに、イスカールナリたちは皆そっくり同じで、個人というものがなかった。彼らには和合があるだけで、愛はなかった。彼らと共に航海している間に、バスチアンは次のような心境になっていた。

バスチアンはもはや、最も偉大な者でありたいとも、最も強い者でありたいとも、最も賢い者でありたいとも思わなかった。彼はもはやそういうことはすべて卒業していた。今は、ただこのままで、ありのままで、愛してもらいたかった。善悪、美醜、賢愚、自分の欠点すべてを含めて――否、そうであるからこそ――愛されたかった。

しかし、あるがままの自分はどうだったのだろうか。

彼にはもはやそれがわからなくなっていた。彼は、ファンタージエン国でほんとうにたくさんのものを手に入れ、そういった才能や力にうずもれてしまい、本当の自分を見失っていたのである。(58)

バスチアンの転生の旅はこの「あるがままに愛されたい」という欲望から始まったのである。

やがて船は、スカイダンの対岸に、すなわちファンタージエン国の彼岸の世界に到達した。そこは、色とりどりのバラの花が咲きみだれているバラの森であった。一本の小径がその森の中へと通じていた。森の中のバラの小径を進んでいくと、バスチアンは「変わる家」にたどりつく。その家はかぼちゃのような形をしていた。立ちどまって見ていると、ハッと驚いた。その家は徐々に、形や大きさが変わって行くのである。

バスチアンが立ちつくしていると、家の中から、温かい、美しい声で女の人が歌をうたっているのが聞こえてきた。

百年もの間待っていたのよ、いとしいお客さま。
ここへの径を見つけたのだから、それはあなたにちがいありません。
のどがかわいているでしょう、おなかがすいているでしょう、みんな用意ができていますよ。
あなたが探し求めているものは何でも、やすらぎも慰めも、みんな用意ができていますよ。
あなたが善人であろうと悪人であろうと、あなたのあるがままでいいのです。あなたは遠い道をやってきたのですから。

偉大なる主よ、さあ、ふたたび小さくおなり！
子供になって、中に入っておいで！
ようこそここへ、大歓迎ですよ。(59)

その歌声の主は、この家の女主人アイウオーラおばさまの声であった。うながされるまま中へ入って、その人をひと目見たとたん、バスチアンは両腕を広げてかけ寄り、「お母さん！　お母さん！」と叫びたい衝動にかられた。こうしてバスチアンは、アイウオーラおばさまの胎内に宿ったのである。

「変わる家」と呼ばれる理由はその家自体の姿・形・大きさが変わるからこう呼ばれているだけではなく、この家の中に宿る者が変わるからこう呼ばれるのである。この意味で、心の成長をとげなければならないバスチアンにとって、

アイウオーラおばさまの「変わる家」に入るということは、必要不可欠なプロセスだったのである。

ということはこういうことだ。バスチアンは、ファンタージエン国へ来て以来この「変わる家」にたどりつくまでに彼がやってきたことは、本当の自分を空想上のもの、ファンタージエン国のもの、現実の自分でないものにすり変えることによって本当の自分を忘れ、なきものにしてきただけだったのだ。ファンタージエン国へやってきて、いかに美しい少年王子さまになろうと、いかに強く勇敢な英雄になろうと、いかに偉大な慈善者になろうと、いかに崇高な賢者になろうと、現実界の自分は何も変わっていなかったのである。それらはすべて、ファンタージエンの中でしか通用しないおさな心の君＝月の子からの贈り物、仮のものにすぎなかったのである。そしてそれらはすべて、ファンタージエン国を去る時はファンタージエン国に残して行かなければならないものだったのである。つまり、これまでファンタージエン国で獲得したつもりになっていた能力や力は、空想上のものにすぎなかったのだ。それらはすべて、「最後の意志」にたどりつくために必要な試行錯誤にすぎなかったのである。人間の現実世界でバスチアンが現実に成長するためには、この試行錯誤によって今やバスチアンの心自体が変わらなければならなかったのである。「現実としてどういう者に変わりたいのか。」これを見つけだすことがバスチアンのファンタージエン国における「おおいなる探索」の本当の目的だったのである。

変わる家での日々は過ぎ去っていった。外はまだ夏が続いていた。バスチアンはその後もずうっと、アイウオーラおばさまに子供のようにあまやかされるのがうれしくてあまやかされるままになっていた。おばさまの果物は初めの頃と同じようにおいしかった。あの焼けつくような飢餓感は少しずついやされていった。……おばさまの細やかな心配りややさしさによっても心が満たされていった。満たされてゆくにつれて、彼がこれまで感じたことがなかった、そしてあらゆる点から見てかつての願望とは異なる全く別の種類の憧れが彼の心の中に目ざめてきた。それは、自分で愛することができるようになりたい、という憧れだった。それが出来なかったことに気づいて、彼はなぜだろうと不思議に思い、かつ悲しかった。けれどもその願望は次第にどんどん強まっていった。

ある日の晩、２人が一緒に座っていた時、彼はそのことについてアイウオーラおばさまにお話をした。

おばさまは、彼にじいーっと耳を傾けていたが、その後長い間、何も言わなかった。おばさまは、バスチアンには理解できない眼ざしで、じいーっと彼を見つめていた。

「やっとあなたは、自分の最後の願を見つけたのね。」と彼女は言った。愛すること、それがあなたの真の意志なのよ。」

「でも、どういうわけで僕はそうすることができないのでしょうか、アイウオーラおばさま。」

「生命の水を飲めばはじめて、できるようになるのよ。」と彼女は答えた。(60)

こういう心境に達する過程の中で、バスチアンは、自分の父母を忘れてしまっていた。今、彼に残されている記憶は、自分の名前だけだった。やがて、「変わる家」での時も満ちて、バスチアンは、「変わる家」を後にすることになる。「変わる家」から外にでると、真冬であった。

バスチアンは、震えながら雪原をさまよう。やがて、盲目の坑夫ヨルの小屋にたどりつく。ヨルは、ミンロード坑という忘れられた夢の採掘場の坑夫であった。ファンタージエン国の地底深くには、忘れられた夢が絵となって、うんも層の中に閉じこめられて横たわっているという。

バスチアンはヨルに、「生命の水」のありかをたずねる。

「よく聞くのだぞ、バスチアン・バルタザール・ブックス。」ヨルは言った。「わしは多くを語ることを好まぬのだ、黙っているほうがより好きなのだ。しかし、今一度だけ、おまえに言っておこう。おまえは生命の水を探している。おまえは、おまえの世界に帰るために、愛することができるようになりたいと思っている。愛する——言うのは簡単だ。だが、生命の水はおまえにたずねるだろう。誰を、とな。ただ漠然と一般的に愛するなんていうことは、できるものではないのだぞ。それなのにおまえは、おまえの名前以外はすべて忘れてしまっている。誰をという問に答えることができない場合は、おまえは生命の水を飲むことは許されないであろう。その際、おまえを助けてやることができるのは、おまえが見つけ出すおまえが忘れていた一枚の夢の絵だけなのだ。その絵が、おまえを生命の泉へと導いてくれるであろう。しかしおまえはそれとひきかえに、今おまえが持っている最後の記憶、すなわちおまえ自身を忘れることになるであろう。この忘れられた夢の採掘の仕事はきびしく、忍耐のいる仕事だ。今わしが言ったことをよくおぼえておくのだぞ、わしはもう二度とは言わぬからな。」(61)

その翌日から、バスチアンはヨルについてミンロード坑に降り、絵の採掘の仕事を始めた。ファンタージエンの地下の暗い深みに入りこみ、生命の泉へ導いてくれる１枚の忘れられた夢の絵を求めて、しんぼう強く掘り続けた。このきつい仕事がどれ程長く続いたかわからない。ある日の夕方だった。運びあげてきた１枚の絵を見たとたん、バスチアンの心はひどく動揺した。

もろい雲母板の中に、――それはそんなに大きいものではなく、普通の本のページくらいの大きさしかなかった――すき通ってとてもはっきりと、白衣を着た１人の男の人が見えたのである。その男の人は片方の手にせっこうの歯形を持って立っていた。その人の姿勢、その人の顔の憂いに沈んだ物静かな表情が、バスチアンの心をとらえた。しかし、バスチアンの心を最も揺り動かしたのは、その人がガラスのように透明な氷の塊の中に閉じ込められていることだった。その人は、破ることのできない透明な氷の中に四方八方から完全に閉じ込められていたのだ。

雪原の上にその絵を置いてその絵を見つめているうちに、バスチアンの心の中に、見知らぬこの男の人に対する思慕の情が目ざめてきたのである。この思慕の情は、大潮のようにはるかかなたから押しよせてきて、初めはほとんど気づかない程だったが、どんどん近づいて来て、ついには家の高さほどもある大波になって、すべてを呑みこみ、すべてをさらってゆくのに似ていた。バスチアンはその大波に呑まれ、さらわれてしまいそうだった。バスチアンの心はうずいた。バスチアンの胸はこの思慕の情に抗するにはあまりにも小さすぎた。まだ残っていた自分自身の記憶はすべて、この大波にさらわれてしまったのである。こうしてバスチアンは、その時まで持っていた最後のもの、すなわち自分の名前を忘れてしまったのである。(62)

こうしてバスチアンはついに、生命の泉へ導いてくれる１枚の絵を見つけ出したのである。その代償に、彼は今や自分の名前さえも忘れてしまった。ということは、今までのバスチアンはもはやもうバスチアンではなくなったということである。おさな心の君が「人の子」によって新たに名前をつけてもらわなければ生まれかわることができなかったと同様に、この名前のない少年も、誰かに名前をつけてもらわなければ生まれかわることができないのである。

この名前のない少年は、１枚のこわれやすいうんも絵を大切に持って、生命の泉を求めて再び旅立ったのである。名前のない少年はこの絵によって一定の方向に導かれているのを感じながら、雪原を進んでいった。ところがその途中、彼は一群の蝶に襲われたのである。それは、のらくら常笑い蝶シュラムッフェ

ンの一群であった。彼らは昔、バスチアンの憐憫の情によって、醜い常泣き蛾アッハライから、わけもなくただただたのしいだけの美しい蝶シュラムッフェンに変身させてもらった連中だった。彼らはこの今は名前のない少年に、自分たちのお頭になってくれ、さもなければ、もとの常泣き虫・アッハライの姿にもどしてくれ、という。もうバスチアンではなくなっているこの名なしの少年は、それはできないと言う。そうするとシュラムッフェンたちは、この少年を逃すものか、さらって行くと言って襲ってきたのである。このどさくさの中で、少年が大切に持っていたあのうんも絵は、粉々に壊されてしまったのである。こうしてこの少年は、自分を生命の泉へ導いてくれる手がかりをすべて失ってしまったのである。少年は雪原に身をくずして、泣いて、泣く。

涙にかすんだまなざしをあげると、雪原のかなたに、何かうごめくものが目に入る。それがだんだん近づいてくる。それは、アトレーユと幸の竜フッフールであった。

名前をなくした少年はおずおずと立ちあがって、アトレーユの方へ2、3歩あゆみよった。それから立ったままだった。アトレーユは何もしなかった。彼はその名前のない少年を思いやりをこめて静かにまっ正面から見つめていた。アトレーユの胸の傷からはもはや血は出ていなかった。

2人は長い間、向かい合って立っていただけで、どちらからも一言も言わなかった。静寂そのもので、お互いに相手の息づかいが聞こえるほどだった。

名前のない少年はゆっくりと頸にかかっている金の鎖に手をやって、アウリンを頸からはずした。かがんで、ゆっくりとその宝のメダルをアトレーユの前の雪の上に置いた。その時、その名前のない少年は、もう一度、互いに尾をくわえあって楕円を形成している2匹の蛇を、明の蛇と闇の蛇を、じっと見つめた。それから、手をはなした。

その瞬間、その金のお宝アウリンは、燦然と輝き、名のない少年は太陽が目の中にはいった時のように目がくらんで、目を閉じてしまった。ふたたび目を開けると、彼は蒼穹ほども大きなドームの中に立っていた。このドームは黄金の光でできていた。そのドームの真ん中には、巨大なあの2匹の蛇が市壁のように横たわっていた。……蛇に比べると、2人は豆つぶ程小さかった。幸の竜フッフールでさえも、白い小さな虫のように見えるほどだった。……2匹の蛇が横たわっている輪の中央には、大きな泉が力強く水をふきあげていた。……名前のない少年は、渇きにもだえる者のよ

うに、その水の方を見た。――しかし、いったいどうしたらその水の所に行くことができるのだろう。その蛇の頭は、ピクッとも動かなかった。(63)

この時、幸の竜フッフールが頭をもたげて言った。彼には、水の言っていることがわかるというのである。

フッフールは聞き耳をたてて、ゆっくりと一語一語、彼が聞いたことをそのまま言った。

われらは生命の水！
みずから湧き出る泉
飲めば飲むほど
豊かに湧き出す泉

再び幸の竜はしばらくの間、聞き耳をたててから言った。

「水はたえず言っています。

飲め！　飲め！　汝の　欲する　ことを　なせ！　と。」

「でもどうしたら僕たちはあそこへ行くことができるのだろうか？」アトレーユがたずねた。

「水は、私たちの名前をたずねています。」とフッフールが言った。

「僕はアトレーユです。」アトレーユは大声で言った。

「僕はフッフールです。」フッフールは言った。

名前のない少年は、だまったままだった。

アトレーユは彼を見つめていた。それからその少年の手を取って大声で叫んだ。

「彼は、バスチアン　バルタザール　ブックス　です。」(64)

こうして、この名前のない少年は、今ふたたび新しい名前を、――とはいってもそれは前の名前と同じ名前だったけれども――アトレーユによってつけてもらったのである。バスチアンがおさな心の君にしてあげたと同じことを、ここでは、アトレーユがバスチアンにしてあげたのである。そして、おさな心の君がすこやかになって、おさな心の君のファンタージエン国から月の子のファンタージエン国へ転生したように、バスチアンは再びすこやかになって、ファンタージエンの世界から現実の世界へ帰って行くのである。それはそれとして、もうしばらく、この生命の泉の場面の出来事を見ておかなければならない。

それから更に２、３、少年たちは生命の水の問に答えなければならなかったのだが、ついに飲む許しが得られたのである。

その瞬間、黒い巨大な蛇が白い巨大な蛇の尾をくわえたまま、ゆっくり

ゆっくり頭をもたげ始めた。巨大な胴体がもちあがり、ついには片側は黒く、片側は白い高い門になった。

アトレーユはバスチアンを、手を取ってこのぞっとするような恐ろしい門を通って、噴水の方へと連れていった。今やその噴水は、二人の目の前で高々と荘厳に噴きあげている姿が下から上まで全部見えた。フッフールも２人の後からついてきた。彼らがその噴水に近づいて行くにつれ、１歩ごとにバスチアンがファンタージエンでもらったすばらしい贈り物が、一つまた一つ、ぬけ落ちていった。美しい、強い、怖れを知らぬ英雄は、ふたたび、小柄な、でぶの、気の小さい少年にもどっていた。ヨルのミンロード坑の中で働いてボロボロになっていた着物も消え、すっかりなくなっていた。ついに彼は、中央に水晶の樹のように高々と生命の水を噴きあげている噴水の大きな黄金のへりの前に、一糸まとわぬ姿で立っていた。……

それから彼は、まよわずその水晶のように澄んでいる水の中にとびこんだ。そしてころげまわり、激しく息を吐き、水をはねとばし、キラキラ輝く水滴を口を開けて受け、飲んだ。渇きがすっかりいやされるまで、飲んで、飲んで、飲んだ。そうすると、彼の頭のてっぺんから足のつまさきまで、喜びに満たされた、生きる喜びと自分自身である喜びに。というのは、彼は今、自分は誰なのか、自分の所属する世界がどこなのか、知ったからである。彼は新しく誕生したのだ。

そして何よりもよかったことは、彼は今や、まさにあるがままの自分そのものであろうと、意志したことであった。もしも彼が、あらゆる可能性の中からどれでも１つ選び取ってよいと言われたとしても、彼はけっして他のものを選びとりはしなかったであろう。というのは、今や彼は知っていたからである。世の中に喜びの形は何千、何万とあるけれども、それらは結局のところ、愛することができるという喜びなのだ。この両者は、一つにして同一のものなのである。(65)

これが、バスチアンがファンタージエン国で転生をとげた時の様子である。そして彼は、この「生命の泉」で獲得した心身を保持して現実界へ帰ってくることになる。この時の彼の心の状態が、現実の世界で達成する彼の心の成長の基盤となる。それ故、この時のバスチアンの心の状態を明確に把握することは、心の成長を主題としている『はてしない物語』の中でも、最も大切な箇所であるので、それを箇条書きにしておく必要がある。

① 彼が２匹の巨大な蛇の門をくぐって、「生命の泉」の領域に足を踏み入れた

時から、まずは彼の身体の変容が始まる。一歩、一歩、「生命の泉」へ近づいて行くにつれ「美しく、強く、怖れを知らぬ英雄は、ふたたび、小柄で、でぶの、気の小さい少年にもどってしまった」のである。つまり、バスチアンはファンタージエン国へやってきた時より前の、現実の世界での姿にもどってしまったのである。

次に、「生命の泉」の中へ飛び込んで、「生命の水」を飲むことによって、バスチアンは次のような心の変容をとげるのである。

② 彼はまず、自分がでぶで、エックス脚で、非力で、のろまで、チーズのような顔色のさえない小柄の少年であることを、つまり彼は、かつての現実の世界にいた時の彼の身体を、ありのままに認識した。それだけではなく、自分がファンタージエン国に属する存在ではなく、人間界に属する存在であることを、つまり、自分が真に帰属すべき世界をはっきりと認識した。

③ そのことを認識した時、彼は頭のてっぺんから足のつま先まで喜びで満たされた。

④ それと同時に彼は、「まさにそのあるがままの自分そのものであろうと意志した」のである。この意志こそは正に、バスチアンが探し求めていた「最後の意志」であり、「真の意志」だったのである。この時、「汝の　欲する　ことを　なせ」というアウリンに刻まれていた銘を通して、「おさな心の君」によってバスチアンに贈られていた「おおいなる探索」の課題は、ここに到ってついに解決されたのである。そして何よりもよろこばしいことは、「あるがままの自分で生きよう」という彼の最後の意志が、彼にとっては、他の何にもかえがたい最上の喜びだったということである。

⑤ それと同時にバスチアンは、この時まで望んではいても実現することができなかった願望を、すなわち「愛することができるようになりたい」という願望を、今、実現することができたのである。すなわち、彼は今ここで、「愛することが出来る喜び」を、全身全霊であじわっているのである。

「愛することができるようになりたい」という願望は、昔、バスチアンがアイウオーラおばさまの「変わる家」(胎内) にはぐくまれていた時に、すでに彼の心の中に芽ばえていた願望であった。しかし、あの時は、彼はそうすることができない自分を悲しんでいるだけだった。その後、忘れられた夢の採掘坑の坑夫ヨルに、「誰を」愛するのかとたずねられて、バスチアンは答えることが出来なかった。彼は、アイウオーラおばさまが言ったとおり、「生命の水」を飲んではじめて、愛する対象を知り、愛する能力を獲得したのである。

あるがままの自分そのものであろうと意志することは、あるがままの自分そのものを選び取ることである。あるがままの自分そのものを選び取ることは、あるがままの自分そのものを愛することなのである。従って、バスチアンが愛する対象は、「あるがままのバスチアンそのもの」である。かつてバスチアンが、「だめだ！」(66)と吐き捨てるように拒否し、何が何でも忘れてしまおうと努め、何が何でもなきものにしよう、殺してしまおうとしてきた自分の実像を、今、ここで、「生命の水」を飲んで再びよみがえらせ、そのよみがえったありのままの自分を自分の意志で選びとり、そのありのままの自分を無上の喜びをもって愛することができるようになったのである。

こうして、バスチアンがファンタージエン国から現実の人間界へ帰って来る準備は備わった。バスチアンが、ファンタージエン国を去るべき時は、彼が「生命の水」を飲んで、飲んで、転生をとげた直後に訪れる。さき程、バスチアンとアトレーユとフッフールが入ってきた門と「生命の泉」をはさんでその反対側に、今度は白い蛇が黒い蛇の尾をくわえたまま、グイ、グイと頭をもたげ、巨大な門ができあがったのである。バスチアンはアトレーユに別れを告げ、「生命の水」を両手ですくって、その門へ向かって走る。その門の向かう側は暗闇だった。バスチアンはその門をくぐり抜け、暗闇の中へ飛び込む。彼は、暗闇の中へ落下して行きながら、大声で叫ぶ。

「お父さん！——僕だよ——バスチアン——バルタザール——ブックスだよ！」

まだこう叫んでいる最中に、彼はどこを越えたわけでもないのに、ずうっと前、彼がそこからファンタージエン国へ旅立ったあの学校の物置部屋の中に、彼は再び居たのである。(67)

結局、「生命の水」もファンタージエンからの出口も、アウリンの中にあったのである。つまり、最も重要なこの二つとも、やはりおさな心の君＝月の子からバスチアンへ授けられた贈りものだったのである。

Ⅳ．現実の世界での心の成長

1．親子間の断絶感の克服、親を愛することができる喜び

では、転生したバスチアンは彼の現実の世界に何をもたらしたのだろうか。

朝８時すぎ、学校の物置部屋の中で目をさましたバスチアンは、大急ぎで家に走って帰る。そうすると、昨夜は一睡もせずにバスの安否を気づかっていたお父さんは、狂喜して家にむかえいれ、その日はまる１日、バスチアンの話に

心から親愛の情をこめて耳をかたむけてくれたのである。きのうまでのお父さんは、バスチアンに何があっても、ほとんど口もきかず、ただ悲しそうにしているだけだった。きょうのお父さんは、そんなきのうまでのお父さんと全然ちがっていた。今日のバスチアンもきのうまでのバスチアンと全然ちがっていた。きのうまでのバスチアンとお父さんとの間に立ちはだかっていた越えがたい氷壁のような断絶感は氷解していた。バスチアンの話に熱心に耳をかたむけていたお父さんの目には、喜びの涙が宿っていた。そして、お父さんは言った。

「これからは、これからは、私たちは何もかも変わるぞ。おまえもそう思うだろう。」

バスチアンはうなずいた。(68)

きのうまでのバスチアンは、父にとっては僕なんか存在しないも同然なんだ、それならそれでいいさ、僕にとってだってこんな親父は存在していないも同然なんだと思い込み、白い目で見ていた。しかし、今日のバスチアンはきのうまでのバスチアンとはちがっていた。「生命の泉」で、ありのままの自分を愛することができるようになっていたバスチアンは、現実の世界では、ありのままの父をも愛することができるようになっていたのである。こうしてバスチアンは、母が亡くなって以来失われていた父子間の愛情を、ファンタージエン国へ行って帰ってくることによって回復したのである。愛することができるようになったということは、最も重要で、最も根本的な心の成長概念なのである。

2．恐怖心の克服　生きることに対する逃避姿勢から対決姿勢へ

「生命の泉」で、あるがままの自分であろうと意志し、あるがままの自分で生きることに無上の喜びを獲得していたバスチアンは、現実の世界にもどってからも生きることに対する姿勢が以前とは180度ちがっていた。

次の日、バスチアンは自分から、コレアンダーさんの所へ本を盗んだことをあやまりに行くと言う。バスチアンに代わってあやまってやろうか、という父に対して、バスチアンははっきり言う。

「いーや、これは僕のことだよ。だから自分でやるよ。今すぐするのが一番いいと思う。」

バスチアンは立ちあがって、マントを着た。お父さんは何も言わず、おどろいて、そして感心して、息子を見つめた。以前は、息子がこういう態度を取ったことはなかったのだ。(69)

自分の現実の問題を自分の力でたくましく解決しようとすること、つまり自立心を身につけるということは、子供から大人への重要な心の成長概念なのである。バスチアンのこの態度は、あるがままの自分を愛することができるようになっていた証なのである。そして今のバスチアンには、コレアンダーさんに対する恐怖心もほとんどなくなっていた。

バスチアンは実際に１人でコレアンダーさんの店へ行って、『はてしない物語』という本をぬすんだことをわびる。しかし意外なことに、この日のコレアンダーさんは、かつてのあのかみつき癖のあるブルドックのようなＫＫＫじいさんではなかった。そしてこれまた意外なことに、うちの店からなくなった本は一冊もない、君はうちの店から本を盗んでなんかいない、と彼は断言したのである。バスチアンは僕が盗んだ本は、おじさんがここに座って読んでいた本だ、あかがね色の絹表紙の本で、『はてしない物語』という標題の本だった。内容はかくかくしかじかの本だった。覚えているでしょう、と説明したけれども、そんな本はうちの店にはおいてなかった、と言うのである。それどころか、ファンタージエン国へ行っていろいろな体験をして帰ってきたというバスチアンに何の疑問も反論も示さず、それどころか、君のようにファンタージエン国へ行って、またこちらの世界へもどって来ることのできた人こそが、両方の世界を豊かにすることができるのだとほめ、はげましてくれたのである。そして、店から帰っていくバスチアンのうしろ姿を信頼と希望をこめて見送りながら、コレアンダーさんは次のようにつぶやく。

> 「バスチアン・バルタザール・ブックス、もし私がまちがっていなければ、君はきっとまだたくさんの他の人に、ファンタージエンへ行く道を教えてあげることだろう、そうすればその人が、私たちに生命の水を持ってきてくれることだろう、そのためにね。」(70)

３．生きる喜び　愛する喜び

バスチアンの心の成長は、この現実の世界の自分自身とまわりの人々に、結局は次のような結果をもたらしたのである。

> 彼がこの世界に帰ってきてからずうっと後になっても、大人になり更についには老人になった時も、この喜び（注、愛することができる喜び）は彼から消えてなくなることはいささかもなかった。彼の生涯で最も苦しかった時でさえも、彼の心の喜びは彼自身にはほほえみを与え、他の人々には慰めを与えた。(71)

ここで述べられていることは、バスチアンがファンタージエン国から帰ってきてから60年、70年と時間が流れ、バスチアン少年がバスチアンじいさんになって行く際の心境である。彼が「生命の水」を飲んで得た「生きる喜び」と「愛することができる喜び」は、一生の間、しかもどんなに苦しい時も、どんなにつらい時も、けっして失われることはなかったのである。しかも、ありのままの自分を愛すことができるという愛の原形は、まず始めに父へ及ぼされ、彼が齢を重ねて行くにつれて、更に彼の周囲の人々に及ぼされていったのである。つまり、彼の愛は隣人愛へと昇華されていったのである。そしてバスチアンが身につけたこの喜びは、一生の間、自他にほほえみと慰めを与えつづけたのである。とすれば、この喜びこそはバスチアンが身につけた最大の心の成長であり、人生で最も大切な徳なのであろう。

エンデが「愛する喜び」、「生きる喜び」をテーマとして扱った作品は、この『はてしない物語』が最初でもないし、唯一のものでもない。これらはこれより7年も前にエンデが公刊した『モモ』においても、やはりそれらは主要テーマだったのである。愛は主人公モモの主要な徳であり、生きる喜びは、これはそこでは仕事をする喜びとして述べられているが、これはモモにつぐ第二の主人公である道路掃除夫ベッポの主要な徳だったのである。(72)

> ベッポじいさんは、街がまだ寝静まっている夜明け前のこの数時間が特にすきだった。彼は自分の仕事を喜んで、しかも徹底的に、行った。(73)

ベッポじいさんも、昔々、ファンタージエン国へ行って、「生命の水」を飲んでからこの世へやってきた人だったのかも知れない。

最後に、話を再び『はてしない物語』にもどす。原初にバスチアンの心を占めていたのは、自他を愛することのできない悲しさ、外界に対する恐怖心、生きる苦しさといったものであった。バスチアンの心を最終的に満たしたのは、「生きる喜び」、「愛することができる喜び」、一言で言えば、「喜び」である。悲しさ・恐ろしさ・苦しさから喜びに到る心の成長過程の描き方は、エンデが指摘している通り、「中世の錬金術に似たやり方」(74)によったものである。錬金術とは言っても、純科学的なもの、宗教的ないしは秘儀的なもの、あるいは心理的なものなど、いろいろあるようである。本書でエンデが行っている錬金術は、一種の「心の錬金術」とでも言うべきものなのであろう。いずれにせよ、卑なるものが死と転生を経て、貴なるものへと錬成して行く道筋は、あらゆる錬金術に共通している道筋である。そしてエンデにとっては、生きる喜び・愛する喜びは彼の心の錬金術によって錬成された黄金に等しきものなのである。

ではいったい、どうしたら卑なるものから貴なるものを創り出すことができるのか。この具体的な方法こそは、古代ギリシアの時代から今日に到るまで人類が探究してきた錬金術の肝心要の点である。M. エンデの心の錬金術においては、それは本稿において見てきた通り、ファンタージエン国を遍歴すること、つまりファンタジーレン（空想すること）だったのである。では、エンデは、ファンタジーをいかなるものと見なしているのであろうか。これに対する答は、日本放送協会が企画した「アインシュタイン・ロマン」の取材陣の質問に対する彼自身の返答の中に明確に論じられている。

最初に話された、子孫へ向かっての時間の戦争に戻ります。この戦争は相手が見えにくい戦争で、しかも、環境か社会かの二つのカタストロフィしか残されていないとおっしゃいました。唯一の解決方法は意識の変革だとおっしゃいましたが、どのような方法があるのでしょうか。

エンデ　ここでファンタージエンについて一言話す必要があります。通常、一般的にファンタージエンとは現実から逃避する手段であり、どこか知らないところへ行って、空想的冒険をするためにあるものだと考えられています。しかし、私にとってファンタジーとは、新しい観念を形成する、または、既存の観念を新しい関係形態におく人間の能力なのです。その意味では、私たち現代の人間にとって、具体的なファンタジーを発達させることほど必要なものはないのです。この具体的ファンタジーによってこそ、私たちは、まだ見えない、将来起る事物を眼前に思い浮べることができるのです。創造的能力によってそれをしなければなりません。読書を通じて、または、映画、演劇、絵画によってもできるでしょう。[75]

これによれば、エンデが駆使しているファンタジーとは、新しい観念（喜び）を形成する能力（錬成術）であり、既存の観念（恐怖心）を新しい関係形態（喜びに満ちた社会関係）におく能力（錬成術）なのである。エンデにとってのファンタジーは、新しい貴なる心（喜び）を練成する方法であるにとどまらず、新しい貴なる社会関係（喜びと隣人愛に満ちた共同社会）を錬成するための、更には、新しい貴なる文明を錬成するための方法でもある。そのためには、想像力（ファンタジー）は、創造力でなければならないのである。そうであってはじめて、ファンタジーは錬成術となるのである。エンデにとっては、ファンタジー、すなわち『はてしない物語』におけるファンタージエンとは、こういうものなのである。

注

(1) エンデ全集 15『オリーブの森で語りあう』丘沢静也訳　岩波書店　1997 年 54 ～ 55 頁

(2) Michael Ende »Die unendliche Geschichte« Thienemanns Verlag　1979 年　6 ページ

(3) 同書　6 ～ 7 ページ

(4) 同書　8 ～ 9 ページ

(5) 同書　9 ページ

(6) 同書　38 ページ

(7) 同書　54 ～ 55 ページ

(8) 同書　13 ページ

(9) 同書　34 ～ 35 ページ

(10) 同書　35 ページ

(11) 同書　12 ページ

(12) 同書　13 ページ

(13) 同書　13 ページ

(14) 同書　14 ～ 15 ページ

(15) 同書　10 ～ 11 ページ

(16) 同書　23 ページ

(17) 同書　43 ページ

(18) 「ミヒャエル・エンデ　VS　井上ひさし」　『朝日ジャーナル』　朝日新聞社　1989 年 4 月 14 日号　24 ページ

(19) Michael Ende »Die unendliche Geschichte« Thienemanns Verlag　1979 年　190 ページ

(20) 同書　54 ページ

(21) 同書　61 ページ

(22) 同書　106 ページ

(23) 同書　109 ページ

(24) 同書　111 ページ

(25) 同書　147 ～ 148 ページ

(26) 同書　160 ～ 161 ページ

(27) 同書　19 ページ

(28) 同書　5 ページ

(29) 同書　190ページ
(30) 同書　193ページ
(31) 同書　419ページ
(32) 子安美知子著『エンデと語る』朝日選書306　朝日新聞社　1986年　119～120ページ
(33) ミヒャエル・エンデ『オリーブの森で語りあう』　（エンデ全集15）　丘沢静也訳　岩波書店　1997年　61～62頁
(34) Michael Ende ›Die unendliche Geschichte‹ Thienemanns Verlag　1979年　94ページ
(35) 同書　193～194ページ
(36) 同書　196ページ
(37) 同書　197ページ
(38) 同書　198ページ
(39) 同書　199ページ
(40) 同書　200ページ
(41) 同書　200～201ページ
(42) 同書　207ページ
(43) 同書　211ページ
(44) 同書　228ページ
(45) 同書　228～229ページ
(46) 同書　262ページ
(47) 同書　280～281ページ
(48) 同書　289ページ
(49) 同書　316～317ページ
(50) 同書　328ページ
(51) 同書　332～335ページ
(52) 同書　347ページ
(53) 同書　356ページ
(54) 同書　357ページ
(55) 同書　364ページ
(56) 同書　369ページ
(57) 同書　374ページ
(58) 同書　377ページ

(59) 同書　383ページ
(60) 同書　393～394ページ
(61) 同書　402ページ
(62) 同書　405ページ
(63) 同書　413～414ページ
(64) 同書　414ページ
(65) 同書　415～416ページ
(66) 同書　94ページ
(67) 同書　419ページ
(68) 同書　422ページ
(69) 同書　423ページ
(70) 同書　428ページ
(71) 同書　416ページ
(72) 拙著「静岡大学人文論集」第53号の1「ミヒャエル・エンデ『モモ』における時間の本質について」を参照すること
(73) Michael Ende ›MOMO‹ Thienemans Verlag　1993年　36ページ
(74) 子安美知子著『エンデと語る』　朝日新聞社　1986年　119ページ
(75) ミヒャエル・エンデ／河邑厚徳編著「NHK　アインシュタイン・ロマン」第6巻「エンデの文明砂漠」日本放送協会1991年12月25日　20～21ページ。同じ趣旨のことは、同書65ページにも再度、語られている。